

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2020年6月26日
【事業年度】	第115期（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）
【会社名】	株式会社大東銀行
【英訳名】	THE DAITO BANK, LTD.
【代表者の役職氏名】	取締役社長 鈴木 孝 雄
【本店の所在の場所】	福島県郡山市中町19番1号
【電話番号】	郡山（024）925 - 8225
【事務連絡者氏名】	常務取締役経営部長 三 浦 謙 一
【最寄りの連絡場所】	東京都千代田区神田小川町二丁目2番地センタークレストビル4階 株式会社大東銀行 東京事務所
【電話番号】	東京（03）5244 - 5712
【事務連絡者氏名】	東京事務所長 山 田 美 史
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号） 株式会社大東銀行 東京支店 （東京都千代田区神田小川町二丁目2番地 センタークレストビル4階） （注） 東京支店は金融商品取引法の規定による縦覧場所ではありません が、投資者の便宜のため縦覧に供するものであります。

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 当連結会計年度の前4連結会計年度及び当連結会計年度に係る次に掲げる主要な経営指標等の推移

		2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
		(自2015年 4月1日 至2016年 3月31日)	(自2016年 4月1日 至2017年 3月31日)	(自2017年 4月1日 至2018年 3月31日)	(自2018年 4月1日 至2019年 3月31日)	(自2019年 4月1日 至2020年 3月31日)
連結経常収益	百万円	14,801	13,948	13,576	12,564	12,452
連結経常利益	百万円	3,235	2,017	1,710	867	1,466
親会社株主に帰属する当期純利益	百万円	2,557	1,462	1,298	1,246	1,062
連結包括利益	百万円	2,716	773	732	2,258	1,942
連結純資産額	百万円	40,351	39,194	39,540	41,415	39,090
連結総資産額	百万円	802,919	791,009	800,432	789,773	790,655
1株当たり純資産額	円	312.30	3,029.13	3,055.90	3,200.92	3,019.78
1株当たり当期純利益	円	20.17	115.37	102.43	98.35	83.86
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	円	-	-	-	-	-
自己資本比率	%	4.93	4.85	4.83	5.13	4.84
連結自己資本利益率	%	6.65	3.75	3.36	3.14	2.69
連結株価収益率	倍	8.68	14.64	12.17	6.48	6.79
営業活動によるキャッシュ・フロー	百万円	11,904	3,266	15,481	21,118	2,256
投資活動によるキャッシュ・フロー	百万円	3,518	8,523	4,083	24,111	13,876
財務活動によるキャッシュ・フロー	百万円	2,400	393	382	379	380
現金及び現金同等物の期末残高	百万円	49,549	54,414	34,465	37,079	48,318
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	602 [179]	583 [166]	550 [166]	524 [160]	506 [153]

(注) 1 当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

2 2017年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益は、2016年度の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出しております。

3 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないので記載しておりません。

4 自己資本比率は、(期末純資産の部合計 - 期末非支配株主持分)を期末資産の部の合計で除して算出しております。

(2) 当行の当事業年度の前4事業年度及び当事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第111期	第112期	第113期	第114期	第115期
決算年月		2016年3月	2017年3月	2018年3月	2019年3月	2020年3月
経常収益	百万円	13,607	12,686	12,331	11,375	11,287
経常利益	百万円	3,101	1,894	1,663	759	1,397
当期純利益	百万円	2,481	1,375	1,273	1,189	1,015
資本金	百万円	14,743	14,743	14,743	14,743	14,743
発行済株式総数	千株	127,014	127,014	12,701	12,701	12,701
純資産額	百万円	38,445	37,168	37,459	39,193	37,005
総資産額	百万円	799,843	787,744	797,024	785,888	787,270
預金残高	百万円	706,019	692,729	692,197	679,056	681,903
貸出金残高	百万円	486,049	489,238	519,795	530,084	538,354
有価証券残高	百万円	236,926	225,049	226,334	204,427	187,232
1株当たり純資産額	円	303.28	2,932.11	2,955.53	3,092.52	2,920.12
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額)	円 (円)	3.00 (-)	3.00 (-)	30.00 (-)	30.00 (-)	30.00 (-)
1株当たり当期純利益	円	19.58	108.54	100.46	93.89	80.15
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	円	-	-	-	-	-
自己資本比率	%	4.80	4.71	4.69	4.98	4.70
自己資本利益率	%	6.66	3.63	3.41	3.10	2.66
株価収益率	倍	8.94	15.58	12.41	6.78	7.10
配当性向	%	15.32	27.64	29.86	31.95	37.42
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	595 [175]	573 [161]	540 [162]	515 [156]	498 [149]
株主総利回り (比較指標：配当込みTOPIX)	%	109.2 (89.2)	107.4 (102.3)	82.0 (118.5)	46.4 (112.5)	44.1 (101.8)
最高株価	円	234	203	1,742 (173)	1,380	661
最低株価	円	156	161	1,212 (152)	581	448

- (注) 1 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
- 2 2017年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施いたしました。1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益は、第112期(2017年3月)の期首に当該株式併合が行われたと仮定して算出しております。
- 3 第113期(2018年3月)、第114期(2019年3月)及び第115期(2020年3月)の1株当たり配当額30.00円は、株式併合後の配当額となります。
- 4 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないので記載しておりません。
- 5 自己資本比率は、期末純資産の部合計を期末資産の部の合計で除して算出しております。
- 6 2017年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施したため、株主総利回りは、当該株式併合の影響を考慮して算出しております。
- 7 最高株価及び最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものであります。
- 8 2017年10月1日付で普通株式10株を1株とする株式併合を実施したため、第113期の株価については当該株式併合後の最高株価及び最低株価を記載し、()内に当該株式併合前の最高株価及び最低株価を記載しております。

2 【沿革】

- 1942年 8月 郡山無尽(株)・会津勸業無尽(株)・磐城無尽(株)の3社が合併して、大東無尽(株)を設立
- 1951年10月 相互銀行法の制定に伴い、(株)大東相互銀行に商号変更
- 1967年 2月 本店新築落成
- 1975年 9月 事務センター新築
- 1976年 4月 オンラインシステム導入
- 1980年 2月 第2次オンラインシステム稼働
- 1983年 4月 国債等募集業務(国債窓販)開始
- 1987年 6月 国債等売買業務(ディーリング)開始
- 1989年 2月 普通銀行へ転換して(株)大東銀行に商号変更
- 1989年11月 クレジットカード業務に係る事業会社として、(株)大東ミリオンカード並びに(株)大東カードを設立
- 1990年 3月 信用保証業務に係る事業会社として、大東信用保証(株)を設立
- 1991年 1月 リース業務に係る事業会社として、(株)大東リースを設立
- 1991年 5月 第3次オンラインシステム稼働
- 1992年12月 東京証券取引所市場第二部に上場
- 1996年 9月 東京証券取引所市場第一部銘柄に指定
- 1998年12月 投資信託窓口販売業務取扱開始
- 2001年 4月 保険商品販売業務取扱開始
- 2002年 1月 (株)大東ミリオンカードを(株)大東クレジットサービスに商号変更
- 2005年 2月 (株)大東クレジットサービスと(株)大東カードが合併し、(株)大東クレジットサービスとなる(現・連結子会社)
- 2005年12月 証券仲介業務取扱開始
- 2006年 4月 大東信用保証(株)を存続会社、(株)大東リースを消滅会社として合併し、株式会社大東リースとなる(現・連結子会社)
- 2009年 1月 新勘定系システム稼働
- 2016年 5月 基幹系システムを地域金融機関向け共同アウトソーシングサービス「NEXTBASE」へ移行

3【事業の内容】

当行及び当行の関係会社は、当行及び連結子会社2社で構成され、銀行業を中心に、クレジットカード事業、リース事業及び信用保証事業等の金融サービスに係る事業を行っております。

当行及び当行の関係会社の事業に係わる位置づけは次のとおりであります。なお、事業の区分は「第5 経理の状況 1(1) 連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

〔銀行業務〕

当行は、本店及び支店の合計58か店において、預金、貸出、有価証券投資、内国為替、外国為替、証券投資信託及び保険商品の窓口販売業務等を行い、地域に根ざした営業を展開しており、お客さまへのサービス向上に積極的に取り組んでおります。

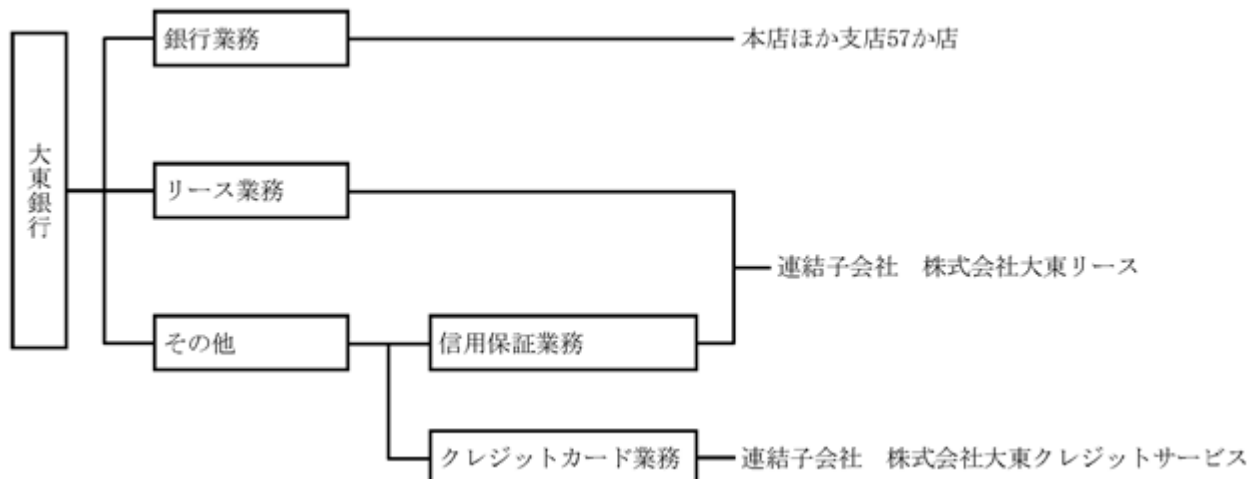
〔リース業務〕

ファイナンス・リース等の業務を行っております。

〔その他〕

その他金融に関連する業務として、住宅ローン等をご利用のお客さまに対する信用保証業務、カード利用による消費活動に対する与信と決済代行を行うクレジットカード業務を行っております。

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。



上記の連結子会社2社の中で国内の証券市場に公開している連結子会社はありません。

4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合 (%)	当行との関係内容				
					役員の 兼任等 (人)	資金援助	営業上の取引	設備の 賃貸借	業務提携
(連結子会社) 株式会社 大東クレジット サービス	福島県 郡山市	40	その他	43.75	4 (3)	-	預金取引関係 金銭貸借関係 保証契約関係	建物一部 賃借	-
株式会社 大東リース	福島県 郡山市	380	リース業務 その他	85.30	4 (3)	-	預金取引関係 金銭貸借関係 リース取引関 係 保証契約関係	建物一部 賃借	-

- (注) 1 「主要な事業の内容」欄には、セグメント情報に記載された名称を記載しております。
2 「当行との関係内容」の「役員の兼任等」欄の()内は、当行の役員(内書き)であります。
3 株式会社大東クレジットサービスは、議決権の所有割合は50%以下ですが、実質的に支配しているため子会社としたものであります。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社における従業員数

2020年3月31日現在

セグメントの名称	銀行業務	リース業務	その他	合計
従業員数(人)	498 〔149〕	2 〔1〕	6 〔3〕	506 〔153〕

- (注) 1 従業員数は、嘱託及び臨時従業員245人を含んでおりません。
2 従業員には執行役員2人を含んでおります。
3 臨時従業員数は、〔 〕内に年間の平均人員を外書きで記載しております。

(2) 当行の従業員数

2020年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
498 〔149〕	39.9	17.3	4,578

- (注) 1 従業員数は、嘱託及び臨時従業員233人を含んでおりません。
2 従業員には執行役員2人を含んでおります。
3 当行の従業員はすべて銀行業務のセグメントに属しております。
4 臨時従業員数は、〔 〕内に年間の平均人員を外書きで記載しております。
5 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
6 当行の従業員組合は、大東銀行職員組合と称し、組合員は393人であります。労使間においては特記すべき事項はありません。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

本項には、将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は本有価証券報告書提出日現在において判断したものであります。

(1) 経営方針

当行では、「共創力と提案力で地域の豊かな未来を実現する」を経営理念として掲げ、その実践に努めることで、企業価値の向上に取り組んでおります。

地域金融機関として、地域のお客さまとより良い関係を構築していくことは重要なことと考えております。こうした関係性を基本とし、お客さまの良きパートナーとして、様々な悩みに対してその解決策を真剣に考えご提案することで、共に新たな価値を創造してまいりたいと考えております。このような取組みを通じて、地域の豊かな未来を創造してまいります。

(2) 経営環境及び対処すべき課題

[第4次中期経営計画の総括]

当事業年度は「第4次中期経営計画」(2017年4月～2020年3月)の最終年度であり、当行は経営計画の実現に向けた取組みを一層加速させてまいりました。

事業を営んでおられるお客さまに対しては、事業承継やM&Aなどの経営課題へお応えするため、外部専門機関との連携を含めた専門チームによる提案活動に注力いたしました。

個人のお客さまに対しては、従来のフリーローンやカードローンに加え、目的ローン(マイカーローン、教育ローン)についても、WEB上でお手続きを完結できるサービスを開始したほか、新たにコンビニATM2社(イーネット、ローソン銀行)と業務提携を行うなど、利便性向上に向けた取組みを行ってまいりました。資産運用においては、多様なニーズにお応えできるよう、投資信託及び保険商品のラインナップの見直しに加え、金融商品仲介業務における取扱商品を拡充いたしました。

また、経営の一層の効率化を実現するため、物件費の削減や業務効率化に係るプロジェクトチームを設置し、全行的なコストの見直しを実施いたしました。

こうした取組みを客観的に評価する指標として、いくつかの経営指標を掲げておりました。その達成状況は次のとおりであります。

[財務目標]

項目	目標(最終年度)	最終年度実績
リテール貸出残高 (2017年4月～2020年3月累計)	400億円増加	294億円増加
当期純利益(連結) (2017年4月～2020年3月毎期)	毎期 10億円	() 10億円

() 2017年度 12億円、2018年度 12億円

[経営戦略管理指標]

項目	目標(最終年度)	最終年度実績
付加価値提案件数 (2017年4月～2020年3月累計)	3,000件	4,773件
医療関連先成約件数 (2017年4月～2020年3月累計)	300件	343件
ダイレクトチャネル契約件数 (2017年4月～2020年3月累計)	10,000件	9,605件

[経営環境の認識及び対処すべき課題]

地域金融機関を取り巻く状況を見ますと、長引く低金利による収益性の低下や、少子高齢化・人口減少によりマーケットの縮小が続いているほか、FinTech企業など異業種の参入が拡大するなど、厳しい経営環境にあるものと認識しております。

このほか、足もとでは新型コロナウイルス感染症の影響から、企業業績や資金繰りの悪化、個人所得の減少などの懸念が発生しております。当行の主たる営業基盤である福島県における感染状況は落ち着いた状況が続いておりますが、感染の更なる拡大が起こった場合は、県内での景気下向きリスクの増大や経済的打撃の長期化が懸念されます。

また、新型コロナウイルス感染症は、これまでの企業経済活動や我々の生活様式にも大きな変化をもたらしております。こうした変化の一部は、感染症収束後も社会に浸透していくものと考えられ、新しい日常「New Normal」への対応も重要なテーマとなってまいります。

[第5次中期経営計画]

このような環境認識のもと、当行は2020年5月15日に、2020年度から2022年度を対象期間とする「第5次中期経営計画」を公表しました。

第5次中期経営計画では、「共創力と提案力で地域の豊かな未来を実現する」という経営理念のもと、取り巻く経営環境や前中期経営計画の取組み結果を踏まえ、四つの注力分野を設定しております。

(法人分野)

・コンサルティング支援

財務諸表等の表層的な情報のみならず、中長期的な取引関係の中で蓄えられた情報をもとに、お客さまと共に経営課題を共有し課題解決に向けたコンサルティング支援を行うことで、お客さまの生産性改善を実現してまいります。

・地域産業の構造変革への対応

少子高齢化や人口減少、新型コロナウイルス感染症の拡大等により、地域の産業構造変革への対応は一層重要な課題となっていることから、地域金融機関として創業支援のほか、事業承継やM&A、事業再生支援に積極的に取り組んでまいります。

(個人分野)

・資産形成サポート

お客さまの資産状況やライフプランに応じたご提案を行うことで、安定的な資産形成をサポートしてまいります。

・高齢者ニーズへの対応

高齢化が進展するなか、長生きリスクへの備えや財産管理や相続など、多様化する高齢者が抱える悩みに対して、外部連携先と協働することでワンストップでのサービス提供を目指してまいります。

(人材育成、人材活躍促進)

・人材競争力の強化

お客さまと共に新たな価値を創造していくため、コンサルティング能力や目利き力、マネジメント力の強化に努めてまいります。

・能力に応じた適材適所の人材配置

能力に応じた適材適所の人材配置を実現するため、年齢や性別に捉われることなく多様な人材の活躍を促進してまいります。

(新型コロナウイルス感染症対策)

・新型コロナ対策支援チーム

新型コロナウイルス感染症の影響を受けられたお客さまを全力でサポートするため、「新型コロナ対策支援チーム」を新たに設置するほか、外部機関との連携をより強固にすることで、支援体制をより一層強化してまいります。

こうした取組みを客観的に評価するため、当行では次の経営指標を掲げております。

[目標とする経営指標]

項目	目標 (最終年度)
当期利益	() 7億円
コア業務純益 (除く投資信託解約損益)	15億円
預り資産残高	50億円増加

() 每期 7 億円

2【事業等のリスク】

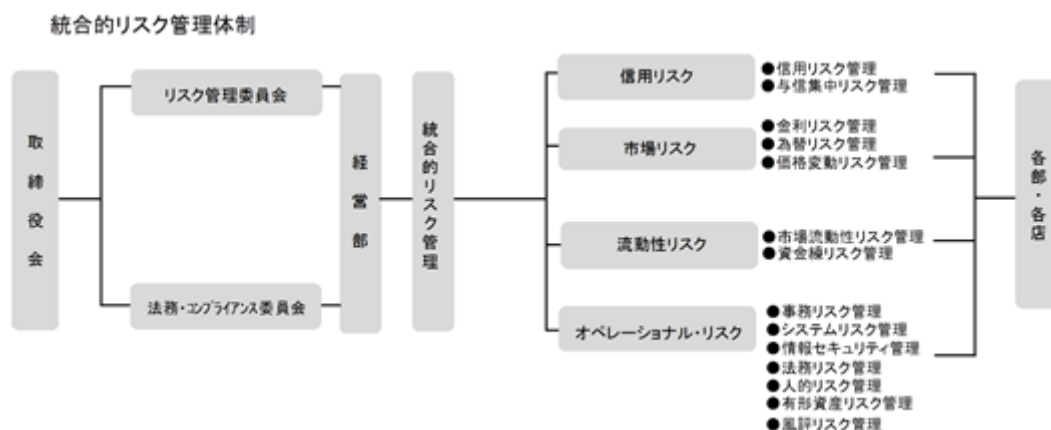
有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスクは、以下のとおりであります。

なお、本項には将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は当連結会計年度末現在において判断したものであります。

当行は、リスク管理を経営の最重要課題のひとつとして位置づけ、取締役会において「リスク管理の基本方針」を定め、リスク管理の一層の強化・充実に取り組んでおります。

リスク管理体制については、経営部において銀行全体のリスクの統合的管理に努めるとともに、リスク管理の基本方針に則ってリスクを適切に管理する「リスク管理委員会」を設置しております。

当行の銀行全体のリスクを統合的に管理・コントロールする体制は次のとおりであります。



信用リスク管理体制

審査部門と営業推進部門を分離し独立性を堅持しながら、決して利益追求にのみ走ることのないよう相互に牽制できる体制としております。

与信取組みにおいては、明確なクレジットポリシーのもと、信用リスクに応じた取組みをモットーとし、リスクに見合ったリターンを確保するばかりでなく、全体の信用リスクの軽減に努めております。

市場リスク管理体制

金利、有価証券の価格、為替等の変動により損失を被ることのないよう、これらの日次管理を行うことはもとより、予測される最大損失を常に想定し、自己資本にて十分対応できる体制としております。

流動性リスク管理体制

予期しない資金の流出（払出し）にも十分対応できるように、常に流動性資金の管理を行っております。

オペレーショナル・リスク管理体制

事務リスク管理体制

事務リスクの状況を的確に把握し、事務リスクの防止・軽減のため適切な対策を講じ、その効果を検証する体制としております。さらに、事務処理のレベルアップを図るため、事務指導や本部主催の各種研修会を実施しております。

また、監査部では厳正な内部管理と事故の未然防止を図るため、営業店、本部、関連会社に対して内部監査を実施しております。

さらに、営業店及び本部各部において、各店長を責任者として部店内検査を毎月実施しております。

システムリスク管理体制

コンピュータが常時正常に稼働できるよう、また、ウィルス等による誤作動や外部からの不正利用を防止できる体制をとっております。

また、お客さまの重要な情報が外部に決してもれることのないようにセキュリティ管理を強化しております。

その他のオペレーショナル・リスク管理体制

法務リスク、人的リスク、有形資産リスク、風評リスクについても、それぞれの担当部門を定めてリスクの把握、評価、モニタリングを行う体制としております。

当行の財政状態及び経営成績等に特に重要な影響を与える可能性があるとして認識しているリスクとしては、以下に記載したリスクのうち、(1)信用リスク及び(2)市場リスクが挙げられます。

当行では、金融資産に係るこれらのリスクについて、統計的な算出手法であるVaRを用いて、ある一定期間において、ある一定の信頼区間(確率)のもと、被る可能性のある最大損失額(リスク量)を把握しております。

これらのリスクが顕在化した場合、当行の業績や業務運営に著しい影響を及ぼす可能性があるため、リスク量を自己資本の範囲内に収まるよう資本配賦(各リスクへの割当)を行うとともに、定期的に配賦状況を確認し、経営戦略と一体でリスク管理を行っております。

(1) 信用リスク

当行は、厳格な資産の自己査定を行い、貸出先の状況や担保の価値等に基づいて、貸倒引当金を計上しております。

しかし、我が国の経済動向、特に当行の主たる営業基盤である福島県の経済動向、不動産価格及び株価の変動等によっては、当行の貸出先の経営状況を悪化させ、債務者区分の下方遷移や、担保価値の下落、又はその他の予期せぬ理由により、当行の不良債権及び貸倒償却引当費用が増加するおそれがあり、その結果、当行の業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(2) 市場リスク

当行は、債券や市場性のある株式等を保有しております。債券は、市場金利の上昇により保有債券の含み損益及び債券関係損益が悪化するおそれがあり、当行の業績に悪影響を及ぼす可能性があります。株式は、株価下落により保有株式の含み損益及び株式等関係損益が悪化するおそれがあり、その結果、当行の業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

また、貸出金や有価証券等の資金運用と、預金等による資金調達には、金利又は期間のミスマッチが存在しており、その影響を抑えるべく適切に管理・運営を行っておりますが、想定以上に金利が変動した場合には、利益が低下ないし損失を被り、当行の業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(3) 流動性リスク

当行は、常に適切な流動性資金の管理を行っておりますが、運用と調達の期間のミスマッチや予期せぬ資金の流出により、必要な資金確保が困難になる、又は通常よりも著しく高い金利での資金調達を余儀なくされることにより損失を被る可能性があります。また、市場の混乱等により市場において取引ができなかったり、通常よりも著しく不利な価格での取引を余儀なくされることにより損失を被る可能性があります。

(4) オペレーショナル・リスク

事務リスク

当行は、事務リスクの所在、種類、特性等を適時・的確に把握し、事務リスクの防止・軽減のため適切な対策を講じておりますが、役職員が正確な事務を怠る、あるいは事故・不正等を起こすことにより、損失を被る可能性があります。

システムリスク

コンピュータシステムは、当行の業務遂行上重要なウェイトを占めております。当行は、日頃からトラブルの防止に努めておりますが、コンピュータシステムのダウンや誤作動等システムの不備等に伴い、当行の業務遂行に悪影響を及ぼす可能性や、コンピュータが不正に使用されることにより、損失を被る可能性があります。

情報資産に関するリスク

当行は、保有するすべての情報資産を、あらゆる脅威から保護すべく、必要な対策を行っておりますが、顧客情報等の漏洩、紛失、不正利用等が発生した場合には、当行の業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

法務リスク

当行は、コンプライアンス(法令等遵守)に関する基本方針、規程を制定し、役職員への周知徹底を図るとともに、体制の整備強化に努めておりますが、法令等違反及び不適切な契約の締結、又はその他の法的原因により損失を被る可能性があります。

風評リスク

当行の事業内容や業績について、事実と異なる風評により評判が悪化し、当行の信用が低下することにより、当行の業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(5) 繰延税金資産に関するリスク

税効果会計の適用により発生する繰延税金資産については、日本公認会計士協会の実務指針等に基づき、将来の損益、課税所得見込み及び同資産の回収可能性を十分検討して計上しております。繰延税金資産の計算は、将来の課税所得に関する様々な予測、仮定に基づいており、実際の結果がかかる予測、仮定とは異なる可能性があります。

また、当行が、将来の課税所得の予測、仮定に基づいて繰延税金資産の一部又は全部の回収ができないと判断した場合や制度の変更等により、当行の繰延税金資産が減額され、その結果、当行の業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(6) 自己資本比率に関するリスク

当行の連結自己資本比率及び単体自己資本比率は「銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準」（2006年金融庁告示第19号）に基づき算出しており、国内基準を適用しております。

当行の自己資本比率が、要求される水準である4%を下回った場合には、業務の全部又は一部の停止等の命令を受けることとなります。当行の自己資本比率は、前述した貸倒償却引当費用の増加、有価証券関係損益の悪化、繰延税金資産の減額のほか、当行の業績悪化等の要因により、影響を受ける可能性があります。

(7) 固定資産の減損に関するリスク

当行が保有する土地、建物等の固定資産については、「固定資産の減損に係る会計基準」（企業会計審議会）を適用しており、収益力の低下、使用目的の変更及び価額の下落などの要因で、評価減による費用処理が発生する可能性があります。

(8) グループ経営に関するリスク

当行は、連結子会社を有しておりますが、当該子会社の業績悪化等により、支援費用等コストが発生する可能性があります。

(9) 災害発生リスク

地震、津波、火災等の災害その他の事象により、当行の役職員及び有形資産等が被災し、当行の業務遂行に悪影響を及ぼす可能性があります。また、災害の規模によっては、地域経済に甚大な被害が及ぶ可能性があり、その結果、当行の業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(10) 感染症の流行に関するリスク

新型インフルエンザ等感染症の流行により、当行の役職員への感染が拡大し、業務運営上十分な人員が確保できなくなるなど、当行の業務遂行に悪影響を及ぼす可能性があります。

当行では、これらの緊急事態を想定しコンティンジェンシープランを策定しており、定期的にBCP（事業継続計画）に基づく訓練等を実施しております。

さらに、新型コロナウイルス感染症に関しては、新型コロナウイルス感染症対策委員会を立ち上げるとともに、「新型コロナウイルス感染症対策の基本方針」を定め、感染拡大防止に努めております。

しかしながら、感染拡大の規模によっては、地域経済に甚大な被害が及ぶ可能性があり、その結果、当行の業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当行グループ（当行及び連結子会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

（財政状態）

当連結会計年度末の主要勘定は、以下のとおりとなりました。

預金（譲渡性預金を含む）につきましては、前連結会計年度末比28億円増加して7,430億円となりました。

貸出金につきましては、前連結会計年度末比80億円増加して5,380億円となりました。

預り資産につきましては、前連結会計年度末比95億円減少して1,102億円となりました。

また、有価証券につきましては、前連結会計年度末比173億円減少して1,869億円となりました。

（経営成績）

経常収益は、資金運用収益の減少などにより、前連結会計年度比1億12百万円減少して124億52百万円となりました。

一方、経常費用は、与信費用の増加等によりその他経常費用は増加したものの、国債等売却損の減少等によるその他業務費用の減少や、経費削減等による営業経費の減少などにより、前連結会計年度比7億10百万円減少して109億86百万円となりました。

この結果、経常利益は、前連結会計年度比5億98百万円増加して14億66百万円となりました。

また、親会社株主に帰属する当期純利益は、前期に固定資産の譲渡に伴う特別利益を計上した反動から、前連結会計年度比1億83百万円減少して10億62百万円となりました。

（セグメントの業績）

〔銀行業務〕

銀行業務では、経常収益は112億87百万円（前連結会計年度比87百万円減少）、経常利益は13億97百万円（前連結会計年度比6億38百万円増益）となりました。

〔リース業務〕

リース業務では、経常収益は8億68百万円（前連結会計年度比11百万円減少）、経常利益は36百万円（前連結会計年度比3百万円減益）となりました。

〔その他〕

その他（クレジットカード業務、信用保証業務）では、経常収益は3億79百万円（前連結会計年度比6百万円減少）、経常利益は33百万円（前連結会計年度比37百万円減益）となりました。

（キャッシュ・フロー）

当連結会計年度末における連結ベースの現金及び現金同等物は、前連結会計年度末比112億38百万円増加して483億18百万円となりました。増加の要因は、投資活動によるキャッシュ・フローの増加によるものであります。

なお、当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

〔営業活動によるキャッシュ・フロー〕

営業活動によるキャッシュ・フローは、資金運用の中核である貸出金や資金調達の源泉である預金がそれぞれ増加したことなどから22億56百万円（前連結会計年度比188億61百万円増加）となりました。

〔投資活動によるキャッシュ・フロー〕

投資活動によるキャッシュ・フローは、保有有価証券のポートフォリオの見直し等に伴う売却や償還が取得を上回ったことなどから138億76百万円（前連結会計年度比102億35百万円減少）となりました。

〔財務活動によるキャッシュ・フロー〕

財務活動によるキャッシュ・フローは、配当金の支払などにより3億80百万円（前連結会計年度比0百万円減少）となりました。

（生産、受注及び販売の実績）

銀行業における業務の特殊性のため、該当する情報がないので記載しておりません。

(参考)

(1) 国内・国際業務部門別収支

当連結会計年度における資金運用収支は、国内業務部門では77億円、国際業務部門では1億11百万円となり、相殺消去後の合計では78億10百万円となりました。役務取引等収支は全体で18億86百万円、その他業務収支は全体で3億7百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前連結会計年度	7,810	142	1	7,951
	当連結会計年度	7,700	111	1	7,810
うち資金運用収益	前連結会計年度	7,975	150	7	3 8,114
	当連結会計年度	7,854	115	8	2 7,958
うち資金調達費用	前連結会計年度	164	7	5	3 162
	当連結会計年度	153	4	6	2 148
役務取引等収支	前連結会計年度	1,797	158	6	1,948
	当連結会計年度	1,738	149	0	1,886
うち役務取引等収益	前連結会計年度	2,754	164	57	2,861
	当連結会計年度	2,806	154	47	2,913
うち役務取引等費用	前連結会計年度	957	5	50	913
	当連結会計年度	1,068	5	47	1,026
その他業務収支	前連結会計年度	380	43	2	426
	当連結会計年度	345	36	2	307
うちその他業務収益	前連結会計年度	1,009	9	2	1,016
	当連結会計年度	1,101	1	2	1,100
うちその他業務費用	前連結会計年度	1,389	53	-	1,442
	当連結会計年度	755	37	-	793

(注) 1 「国内業務部門」とは、当行及び連結子会社の円建取引であります。

2 「国際業務部門」とは、当行の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引は国際業務部門に含めております。

3 資金運用収益及び資金調達費用の合計額の上段の計数は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の利息であります。

4 グループ内での取引は相殺消去しております。

(2) 国内・国際業務部門別資金運用・調達の状況

資金運用勘定平均残高は7,675億41百万円となり、利回りは1.03%となりました。この結果、受取利息は79億58百万円となりました。一方、資金調達勘定平均残高は7,510億67百万円となり、利回りは0.01%となりました。この結果、支払利息は1億48百万円となりました。

国内業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	(7,750) 771,546	(3) 7,975	1.03
	当連結会計年度	(6,408) 768,580	(2) 7,854	1.02
うち貸出金	前連結会計年度	520,930	6,164	1.18
	当連結会計年度	529,633	5,993	1.13
うち商品有価証券	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち有価証券	前連結会計年度	212,773	1,779	0.83
	当連結会計年度	189,939	1,817	0.95
うちコールローン及び買入手形	前連結会計年度	13	0	0.00
	当連結会計年度	-	-	-
うち買現先勘定	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち債券貸借取引支払保証金	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち預け金	前連結会計年度	30,078	27	0.09
	当連結会計年度	42,598	40	0.09
資金調達勘定	前連結会計年度	756,823	164	0.02
	当連結会計年度	751,572	153	0.02
うち預金	前連結会計年度	693,080	145	0.02
	当連結会計年度	687,096	132	0.01
うち譲渡性預金	前連結会計年度	62,935	9	0.01
	当連結会計年度	63,454	10	0.01
うちコールマネー及び売渡手形	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち売現先勘定	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち債券貸借取引受入担保金	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うちコマース・ペーパー	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち借入金	前連結会計年度	804	9	1.18
	当連結会計年度	1,019	10	1.03

- (注) 1 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、(連結)子会社については、半年毎の残高に基づく平均残高を利用しております。
- 2 「国内業務部門」とは、当行及び連結子会社の円建取引であります。
- 3 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高(前連結会計年度527百万円、当連結会計年度525百万円)を控除しております。
- 4 ()内は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息(内書き)であります。

国際業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	8,809	150	1.70
	当連結会計年度	7,064	115	1.63
うち貸出金	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち商品有価証券	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち有価証券	前連結会計年度	8,170	147	1.80
	当連結会計年度	6,551	115	1.75
うちコールローン及び買入手形	前連結会計年度	66	1	1.97
	当連結会計年度	-	-	-
うち買現先勘定	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち預け金	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
資金調達勘定	前連結会計年度	(7,750) 8,891	(3) 7	0.08
	当連結会計年度	(6,408) 7,102	(2) 4	0.06
うち預金	前連結会計年度	1,137	4	0.36
	当連結会計年度	691	1	0.26
うち譲渡性預金	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うちコールマネー及び 売渡手形	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち売現先勘定	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち債券貸借取引受 入担保金	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うちコマースナル・ ペーパー	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-
うち借入金	前連結会計年度	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-

(注) 1 「国際業務部門」とは、当行の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引は国際業務部門に含めております。

2 ()内は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息(内書き)であります。

合計

種類	期別	平均残高(百万円)			利息(百万円)			利回り (%)
		小計	相殺消去 額()	合計	小計	相殺消去 額()	合計	
資金運用勘定	前連結会計年度	772,606	1,429	771,177	8,121	7	8,114	1.05
	当連結会計年度	769,236	1,695	767,541	7,966	8	7,958	1.03
うち貸出金	前連結会計年度	520,930	412	520,517	6,164	5	6,158	1.18
	当連結会計年度	529,633	579	529,053	5,993	6	5,987	1.13
うち商品有価証券	前連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
うち有価証券	前連結会計年度	220,944	646	220,298	1,927	1	1,925	0.87
	当連結会計年度	196,490	571	195,919	1,932	1	1,930	0.98
うちコールローン及 び買入手形	前連結会計年度	79	-	79	1	-	1	1.63
	当連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
うち買現先勘定	前連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
うち債券貸借取引支 払保証金	前連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
うち預け金	前連結会計年度	30,078	370	29,708	27	0	27	0.09
	当連結会計年度	42,598	544	42,054	40	0	40	0.09
資金調達勘定	前連結会計年度	757,964	933	757,030	168	5	162	0.02
	当連結会計年度	752,266	1,199	751,067	155	6	148	0.01
うち預金	前連結会計年度	694,217	370	693,846	149	0	149	0.02
	当連結会計年度	687,788	544	687,244	134	0	134	0.01
うち譲渡性預金	前連結会計年度	62,935	150	62,785	9	0	8	0.01
	当連結会計年度	63,454	75	63,379	10	0	10	0.01
うちコールマネー及 び売渡手形	前連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
うち売現先勘定	前連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
うち債券貸借取引受 入担保金	前連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
うちコマースナル・ ペーパー	前連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-	-	-	-	-
うち借入金	前連結会計年度	804	412	392	9	5	4	1.03
	当連結会計年度	1,019	579	440	10	6	4	0.96

(注) 1 グループ内での取引は相殺消去しております。

2 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高(前連結会計年度527百万円、当連結会計年度525百万円)を控除してあります。

(3) 国内・国際業務部門別役務取引の状況

役務取引等収益は、29億13百万円となりました。このうち為替業務が全体の23.8%、投信窓販業務が全体の23.6%を占めております。一方、役務取引等費用は、10億26百万円となりました。このうち為替業務が全体の9.5%を占めております。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額()	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前連結会計年度	2,754	164	57	2,861
	当連結会計年度	2,806	154	47	2,913
うち預金・貸出業務	前連結会計年度	416	-	11	404
	当連結会計年度	452	-	5	447
うち為替業務	前連結会計年度	545	164	3	706
	当連結会計年度	540	154	3	691
うち証券関連業務	前連結会計年度	3	-	-	3
	当連結会計年度	4	-	-	4
うち代理業務	前連結会計年度	390	-	-	390
	当連結会計年度	411	-	-	411
うち保護預り・貸金庫業務	前連結会計年度	67	-	-	67
	当連結会計年度	66	-	-	66
うち保証業務	前連結会計年度	328	-	42	285
	当連結会計年度	327	-	39	288
うち投信窓販業務	前連結会計年度	606	-	-	606
	当連結会計年度	688	-	-	688
うち保険窓販業務	前連結会計年度	396	-	-	396
	当連結会計年度	314	-	-	314
役務取引等費用	前連結会計年度	957	5	50	913
	当連結会計年度	1,068	5	47	1,026
うち為替業務	前連結会計年度	96	5	3	99
	当連結会計年度	95	5	3	97

(注) 1 「国内業務部門」とは、当行及び連結子会社の円建取引であります。

2 「国際業務部門」とは、当行の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引は国際業務部門に含めております。

3 グループ内での取引は相殺消去しております。

(4) 国内・国際業務部門別預金残高の状況
預金の種類別残高（未残）

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額（ ）	合計
		金額（百万円）	金額（百万円）	金額（百万円）	金額（百万円）
預金合計	前連結会計年度	678,304	751	402	678,653
	当連結会計年度	681,253	649	681	681,221
うち流動性預金	前連結会計年度	416,378	-	357	416,021
	当連結会計年度	432,756	-	485	432,270
うち定期性預金	前連結会計年度	260,949	-	45	260,904
	当連結会計年度	246,655	-	195	246,460
うちその他	前連結会計年度	976	751	-	1,728
	当連結会計年度	1,841	649	-	2,491
譲渡性預金	前連結会計年度	61,680	-	150	61,530
	当連結会計年度	61,833	-	-	61,833
総合計	前連結会計年度	739,985	751	552	740,184
	当連結会計年度	743,087	649	681	743,055

- (注) 1 「国内業務部門」とは、当行及び連結子会社の円建取引であります。
2 「国際業務部門」とは、当行の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引は国際業務部門に含めております。
3 預金の区分は次のとおりであります。
流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金
定期性預金 = 定期預金 + 定期積金
4 グループ内での取引は相殺消去しております。

(5) 国内・国際業務部門別貸出金残高の状況
業種別貸出状況（未残・構成比）

業種別	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額（百万円）	構成比（%）	金額（百万円）	構成比（%）
国内業務部門	529,979	100.00	538,006	100.00
製造業	40,015	7.55	39,102	7.27
農業、林業	818	0.16	907	0.17
漁業	350	0.07	211	0.04
鉱業、採石業、砂利採取業	410	0.08	353	0.06
建設業	27,559	5.20	25,555	4.75
電気・ガス・熱供給・水道業	19,465	3.67	26,709	4.96
情報通信業	3,940	0.74	3,223	0.60
運輸業、郵便業	18,177	3.43	18,915	3.51
卸売業、小売業	33,384	6.30	31,132	5.79
金融業、保険業	39,814	7.51	40,172	7.47
不動産業、物品賃貸業	63,978	12.07	59,818	11.12
各種サービス業	43,424	8.19	43,377	8.06
地方公共団体	66,851	12.61	66,046	12.28
その他	171,790	32.42	182,478	33.92
国際業務部門	-	-	-	-
政府等	-	-	-	-
金融機関	-	-	-	-
その他	-	-	-	-
合計	529,979	-	538,006	-

- (注) 1 「国内業務部門」とは、当行及び連結子会社の円建取引であります。
2 「国際業務部門」とは、当行の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引は国際業務部門に含めております。

外国政府等向け債権残高（国別）
該当ありません。

(6) 国内・国際業務部門別有価証券の状況
有価証券残高（未残）

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額（ ）	合計
		金額（百万円）	金額（百万円）	金額（百万円）	金額（百万円）
国債	前連結会計年度	43,628	-	-	43,628
	当連結会計年度	41,196	-	-	41,196
地方債	前連結会計年度	16,005	-	-	16,005
	当連結会計年度	13,315	-	-	13,315
短期社債	前連結会計年度	-	-	-	-
	当連結会計年度	-	-	-	-
社債	前連結会計年度	89,332	-	-	89,332
	当連結会計年度	83,183	-	-	83,183
株式	前連結会計年度	5,396	-	646	4,750
	当連結会計年度	4,210	-	496	3,714
その他の証券	前連結会計年度	43,770	6,839	-	50,610
	当連結会計年度	39,932	5,598	-	45,530
合計	前連結会計年度	198,133	6,839	646	204,326
	当連結会計年度	181,839	5,598	496	186,941

- (注) 1 「国内業務部門」とは、当行及び連結子会社の円建取引であります。
 2 「国際業務部門」とは、当行の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引は国際業務部門に含めております。
 3 「その他の証券」には、外国債券を含んでおります。
 4 グループ内での取引は相殺消去しております。

(自己資本比率等の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準（2006年金融庁告示第19号）に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

なお、当行は、国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては標準的手法を採用しております。

連結自己資本比率（国内基準）

(単位：億円、%)

	2020年3月31日
1. 連結自己資本比率（2 / 3）	9.53
2. 連結における自己資本の額	376
3. リスク・アセットの額	3,948
4. 連結総所要自己資本額	157

単体自己資本比率（国内基準）

(単位：億円、%)

	2020年3月31日
1. 単体自己資本比率（2 / 3）	9.24
2. 単体における自己資本の額	361
3. リスク・アセットの額	3,905
4. 単体総所要自己資本額	156

(資産の査定)

(参考)

資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」(1998年法律第132号)第6条に基づき、当行の貸借対照表の社債(当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法(1948年法律第25号)第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。)、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は賃貸借契約によるものに限る。)について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

1. 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権をいう。

2. 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいう。

3. 要管理債権

要管理債権とは、3ヵ月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権をいう。

4. 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のものに区分される債権をいう。

資産の査定額

債権の区分	2019年3月31日	2020年3月31日
	金額(億円)	金額(億円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	30	29
危険債権	78	82
要管理債権	21	21
正常債権	5,199	5,287

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当行グループの経営成績等の状況に関する分析・検討内容は次のとおりであります。

なお、以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度の末日現在において判断したものであります。

当連結会計年度の財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容

(業務運営)

当事業年度は「第4次中期経営計画」(2017年4月～2020年3月)の最終年度であり、当行は経営計画の実現に向けた取組みを一層加速させてまいりました。

事業を営んでおられるお客さまに対しては、事業承継やM&Aなどの経営課題へお応えするため、外部専門機関との連携を含めた専門チームによる提案活動に注力いたしました。

個人のお客さまに対しては、従来のフリーローンやカードローンに加え、目的ローン(マイカーローン、教育ローン)についても、WEB上でお手続きを完結できるサービスを開始したほか、新たにコンビニATM2社(イーネット、ローソン銀行)と業務提携を行うなど、利便性向上に向けた取組みを行ってまいりました。資産運用においては、多様なニーズにお応えできるよう、投資信託及び保険商品のラインナップの見直しに加え、金融商品仲介業務における取扱商品を拡充いたしました。

また、経営の一層の効率化を実現するため、物件費の削減や業務効率化に係るプロジェクトチームを設置し、全行的なコストの見直しを実施いたしました。

(財政状態)

当連結会計年度の主要勘定は、以下のとおりとなりました。

預金(譲渡性預金を含む)の期中平均残高につきましては、主に個人預金が減少したことなどから、前連結会計年度比60億円減少して7,506億円となりました。これは、低金利が継続している状況の中で、定期性預金が減少傾向にあることや、預金の一部が投資信託や保険商品等の運用商品へシフトしていることなどによるものであります。

預金については資金調達の源泉であることから、預金残高を増加させるべく、法人取引先のメイン化の推進などにより底上げを図ってまいります。

貸出金の期中平均残高につきましては、住宅ローンを中心に個人向け貸出が増加したことなどから、前連結会計年度比85億円増加して5,290億円となりました。これは、第4次中期経営計画の目標として掲げているリテール貸出残高の増加に向けて、ローンセンターの人員拡充や営業時間の見直し、更には営業店とローンセンターとの連携強化など、住宅ローンの販売体制の強化に努めたことなどによるものであります。

また、有価証券の期中平均残高につきましては、前連結会計年度比243億円減少して1,959億円となりました。これは、前期に引き続き保有資産のポートフォリオの見直しを行った結果であります。

主要勘定の期中平均残高	前連結会計年度 (億円)(A)	当連結会計年度 (億円)(B)	増減(億円) (B)-(A)
預金(譲渡性預金を含む)	7,566	7,506	60
貸出金	5,205	5,290	85
有価証券	2,202	1,959	243

なお、当連結会計年度末における連結ベースのリスク管理債権残高は133億円で前連結会計年度末比2億円増加しました。

貸出金残高に占める比率は2.47%で前連結会計年度末比0.01ポイント上昇しました。

リスク管理債権残高 (貸出金残高に占める比率)	前連結会計年度末 (億円、%) (A)	当連結会計年度末 (億円、%) (B)	増減(億円、%) (B)-(A)
リスク管理債権残高合計	130 (2.46)	133 (2.47)	2 (0.01)
破綻先債権	3 (0.07)	3 (0.05)	0 (0.02)
延滞債権	105 (1.99)	109 (2.02)	3 (0.03)
3ヵ月以上延滞債権	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
貸出条件緩和債権	20 (0.39)	20 (0.38)	0 (0.01)

(注)表中()内は、貸出金残高に占める比率であります。

(経営成績)

経常収益は、資金運用収益の減少などにより、前期比 1 億12百万円減少して124億52百万円となりました。

一方、経常費用は、与信費用の増加等によりその他経常費用は増加したものの、国債等売却損の減少等によるその他業務費用の減少や、経費削減等による営業経費の減少などにより、前期比 7 億10百万円減少して109億86百万円となりました。

この結果、経常利益は、前期比 5 億98百万円増加して14億66百万円となりました。

また、親会社株主に帰属する当期純利益は、前期に固定資産の譲渡に伴う特別利益を計上した反動から、前期比 1 億83百万円減少して10億62百万円となりました。

(主な収支の内訳)

連結業務粗利益は、その他業務利益の増加を主因に、前連結会計年度比 5 億30百万円増加して100億 4 百万円となりました。

資金利益は、貸出金利息の減少を主因に、前連結会計年度比 1 億41百万円減少して78億10百万円となりました。

貸出金においては、住宅ローンをはじめとするリテール貸出の増強などにより、残高は増加基調で推移したものの、利回りの低下が利息減少の主な要因であります。但し、足もとでは利回りの低下は緩やかになってきております。今後も引き続き、リテール貸出を中心に残高の増加に努めるとともに、適正金利の確保を図ってまいります。

役務取引等利益は、法人関連手数料の増加などにより役務取引等収益は増加したものの、住宅ローンの増加などによる役務取引等費用の増加等により、前連結会計年度比61百万円減少して18億86百万円となりました。足もとでは新型コロナウイルス感染症の影響などにより、市況は不安定な状況にありますが、今後も引き続き、資産運用商品の拡充など個人向けサービスの充実及び法人向け付加価値サービスの強化に努めてまいります。

その他業務利益は、前連結会計年度比 7 億33百万円増加して 3 億 7 百万円となりました。これは、国債等債券損益が改善したことが主因であります。今後も引き続き、リスク管理を適切に行いながら、相場変動に強いポートフォリオの構築を目指してまいります。

営業経費は、前連結会計年度比 5 億28百万円減少して80億74百万円となりました。これは、働き方改革の推進による時間管理の徹底及び業務効率化などによる人件費の減少、更には積極的な経費削減の取組みによる物件費の減少などが主な要因であります。

主な収支の内訳	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減 (百万円) (B) - (A)
経常収益	12,564	12,452	112
業務粗利益	9,474	10,004	530
資金利益	7,951	7,810	141
資金運用収益	8,114	7,958	155
うち貸出金利息	6,158	5,987	171
うち有価証券利息配当金	1,925	1,930	5
資金調達費用 ()	162	148	14
役務取引等利益	1,948	1,886	61
役務取引等収益	2,861	2,913	51
役務取引等費用 ()	913	1,026	113
その他業務利益	426	307	733
その他業務収益	1,016	1,100	84
その他業務費用 ()	1,442	793	649
営業経費 ()	8,602	8,074	528
その他損益	3	463	460
うち株式等関係損益	128	10	118
うち与信関連費用 ()	183	676	493
うちその他	308	223	85
経常利益	867	1,466	598

特別損益は、前期に営業用資産の売却に伴う固定資産処分益を計上した反動から、前連結会計年度比11億8百万円減少して13百万円となりました。

また、法人税等合計は、特別損益の減少に伴い課税所得が減少したことなどから、前連結会計年度比3億17百万円減少して3億78百万円となりました。

以上の結果、親会社株主に帰属する当期純利益は、前連結会計年度比1億83百万円減少して10億62百万円となりました。

主な収支の内訳	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
経常利益	867	1,466	598
特別損益	1,095	13	1,108
税金等調整前当期純利益	1,963	1,452	510
法人税等合計 ()	695	378	317
非支配株主に帰属する当期純利益 ()	20	11	9
親会社株主に帰属する当期純利益	1,246	1,062	183

(経営方針等に照らした、経営者による経営成績等の分析・検討内容)

第4次中期経営計画(2017年4月～2020年3月)において目標として掲げた経営指標に対して、最終年度(2020年3月期)の達成状況については以下のとおりであります。

リテール貸出残高(単体)は、ローンセンター体制拡充等による住宅ローンの増加などにより、3年間で294億円(達成率73.5%)増加しました。

当期純利益(連結)は、計画期間のいずれも10億円(2018年3月期12億円、2019年3月期12億円、2020年3月期10億円)の目標を達成しました。

付加価値提案件数及び医療関連先成約件数は、法人営業戦略チームと営業店が一体となって本業支援活動を行った結果、いずれも目標を達成しました。

ダイレクトチャネル契約件数は、インターネット支店の開設、インターネット投資信託の推進や、スマートフォン口座開設アプリの機能改善などに取り組んだ結果、9,600件を超えました(達成率96%)。

	目標(最終年度)	最終年度実績
リテール貸出残高 (2017年4月～2020年3月累計)	400億円増加	294億円増加
当期純利益(連結) (2017年4月～2020年3月毎期)	毎期 10億円	() 10億円
付加価値提案件数 (2017年4月～2020年3月累計)	3,000件	4,773件
医療関連先成約件数 (2017年4月～2020年3月累計)	300件	343件
ダイレクトチャネル契約件数 (2017年4月～2020年3月累計)	10,000件	9,605件

() 2017年度 12億円、2018年度 12億円

目標とする経営指標に対して、概ね順調な進捗でありましたが、リテール貸出については、住宅ローンの増加が下支えとなっており、法人向け貸出に関しては課題が残る結果となりました。

今後は、「第5次中期経営計画」の方針に基づき、お客さまへの価値あるサービスの提供に注力し、諸施策に役員一丸となって取り組むことで企業価値の向上に努めてまいります。

なお、「第5次中期経営計画」の収益計画の策定にあたっては、新型コロナウイルス感染症による政府の支援等コロナ関連融資の増加による貸出金利の増加、証券市場の低迷等による有価証券関係収益の減少や預り資産の販売の低迷による役務取引等収益の減少等を織り込んでおります。

キャッシュ・フローの状況の分析・検討内容並びに資本の財源及び資金の流動性に係る情報

(キャッシュ・フロー)

当連結会計年度末における連結ベースの現金及び現金同等物は、前連結会計年度末比112億38百万円増加して483億18百万円となりました。増加の要因は、投資活動によるキャッシュ・フローの増加によるものであります。

なお、当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は次のとおりであります。

〔営業活動によるキャッシュ・フロー〕

営業活動によるキャッシュ・フローは、資金運用の中核である貸出金や資金調達の源泉である預金がそれぞれ増加したことなどから 22億56百万円（前連結会計年度比188億61百万円増加）となりました。

〔投資活動によるキャッシュ・フロー〕

投資活動によるキャッシュ・フローは、保有有価証券のポートフォリオの見直し等に伴う売却や償還が取得を上回ったことなどから138億76百万円（前連結会計年度比102億35百万円減少）となりました。

〔財務活動によるキャッシュ・フロー〕

財務活動によるキャッシュ・フローは、配当金の支払などにより 3億80百万円（前連結会計年度比0百万円減少）となりました。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
現金及び現金同等物の期末残高	37,079	48,318	11,238
営業活動によるキャッシュ・フロー	21,118	2,256	18,861
投資活動によるキャッシュ・フロー	24,111	13,876	10,235
財務活動によるキャッシュ・フロー	379	380	0

（資本の財源及び資金の流動性）

当行グループの中核事業は銀行業であり、主にお客さまからお預け入れいただいた預金を貸出金や有価証券で運用しております。

なお、当面の設備投資、成長分野への投資、株主還元等につきましては自己資金で対応する予定であります。

重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

（貸倒引当金）

当行及び連結子会社において、総資産に占める貸出金の比率は高く、貸倒引当金の計上が経営成績等に与える影響が大きいため、重要な会計上の見積りであると判断しております。

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者（以下「破綻懸念先」という。）に係る債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。

上記以外の債権については、主として今後1年間の予想損失額又は今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間又は3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しております。

連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。

当行では、厳格な自己査定を行い、貸出先の状況や保全等に応じて引当金を計上しており、引当金の計上に用いた会計上の見積りは適切であると判断しております。ただし、本見積りは把握可能な情報等に基づき行われております。このため、予測不能な事象の発生等による前提条件の変化等により、見積りが変動する可能性があり、その結果、当行及び連結子会社の貸倒引当金が増減する可能性があります。

なお、新型コロナウイルス感染症に関する見積りについては、「5 経理の状況 注記事項 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 追加情報」に記載しております。

4 【経営上の重要な契約等】

該当ありません。

5 【研究開発活動】

該当ありません。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度中、当行及び連結子会社では、有形固定資産において総額133百万円の投資を行いました。セグメントごとの設備投資等については、次のとおりであります。

銀行業務において施設の改修等を中心とする126百万円の投資を行いました。また、リース業務において2百万円、その他業務において3百万円の投資を行いました。

なお、当連結会計年度において、営業に重要な影響を与える設備の売却、除却等はありません。

2【主要な設備の状況】

当連結会計年度末における主要な設備の状況は次のとおりであります。

(2020年3月31日現在)

	会社名	店舗名 その他	所在地	セグメントの 名称	設備の 内容	土地	建物	動産	合計	従業員数 (人)	
						面積 (㎡)	帳簿価額 (百万円)				
当行	-	本店 他54店	福島県内	銀行業務	店舗	51,414.19 (7,714.81)	6,746	1,243	227	8,217	441
	-	宇都宮支店 他2店	福島県外	銀行業務	店舗	391.86 (178.01)	53	84	12	151	19
	-	事務センター 他	福島県郡山市他	銀行業務	事務センター等	3,597.91	394	265	104	765	38
	-	社宅・寮	福島県郡山市 他6か所	銀行業務	社宅・寮	4,406.83 (543.70)	306	142	0	449	-
	-	その他の 施設	福島県郡山市他	銀行業務	その他	7,259.65 (1,569.07)	310	122	20	453	-
連結 子会社	(株)大東 リース	本社	福島県郡山市	リース 業務	店舗等	-	-	-	2	2	2
		本社等	福島県郡山市	その他	店舗等	230.00	15	-	-	15	-
	(株)大東クレ ジットサー ビス	本社等	福島県郡山市	その他	店舗等	130.41	111	63	4	178	6

(注) 1 土地の面積欄の()内は、借地の面積(内書き)であり、その年間賃借料は建物も含め74百万円でありま
す。

2 動産は、事務機械301百万円、その他70百万円であります。

3 当行の店舗外現金自動設備69カ所は上記に含めて記載しております。

3【設備の新設、除却等の計画】

当行及び連結子会社の設備投資については、お客さまの利便性向上と、事務の合理化・効率化を目的として各種事務機器の設置、更改を行ってまいります。

当連結会計年度末において計画中である重要な設備の新設、除却等は次のとおりであります。

(1) 重要な設備の新設等

該当事項はありません。

(2) 重要な設備の除却等

該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	18,000,000
計	18,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2020年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2020年6月26日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	12,701,462	12,701,462	東京証券取引所 市場第一部	(注)
計	12,701,462	12,701,462	-	-

(注) 発行済株式は全て完全議決権株式であり、権利内容に何ら限定のない当行における標準となる株式で、単元株式数は100株であります。

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2017年10月1日	114,313	12,701	-	14,743	-	1,294

(注) 株式併合(10株を1株に併合)によるものであります。

(5)【所有者別状況】

2020年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)								単元未満 株式の状況 (株)
	政府及び地方 公共団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他 の法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	28	20	786	62	3	5,764	6,663	-
所有株式数(単元)	-	36,507	2,050	39,769	9,267	8	38,634	126,235	77,962
所有株式数の割合 (%)	-	28.92	1.62	31.50	7.34	0.01	30.61	100.00	-

(注) 1 自己株式28,703株は「個人その他」に287単元、「単元未満株式の状況」に3株含まれております。

2 「その他の法人」の欄には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が1単元含まれております。

(6)【大株主の状況】

2020年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
株式会社プロスペクト	東京都渋谷区千駄ヶ谷一丁目30番8号	2,376	18.75
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	1,148	9.05
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	474	3.74
大東銀行行員持株会	福島県郡山市中町19番1号	438	3.46
DFA INTL SMALL CAP VALUE PORTFOLIO (常任代理人 シティバンク、エヌ・エイ東京支店)	PALISADES WEST 6300, BEECAVE ROAD BUILDING ONE AUSTIN TX 78746 US (東京都新宿区新宿六丁目27番30号)	372	2.93
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口4)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	338	2.67
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口5)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	209	1.64
株式会社東邦銀行	福島県福島市大町3番25号	196	1.55
資産管理サービス信託銀行株式会社(証券投資信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番12号 晴海アイランドトリトンスクエアオフィスタワーZ棟	178	1.40
損害保険ジャパン日本興亜株式会社	東京都新宿区西新宿1丁目26番1号	152	1.20
計	-	5,885	46.44

(注)1 三井住友信託銀行株式会社から、三井住友トラスト・アセットマネジメント株式会社、日興アセットマネジメント株式会社及び日本証券代行株式会社を共同保有者とする2018年12月14日現在の保有株式等を記載した2018年12月20日付の大量保有報告書が関東財務局長に提出されておりますが、当行として2020年3月31日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、株主名簿上の所有株式を上記大株主の状況に記載しております。
なお、大量保有報告書の内容は次のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数 (千株)	株券等保有割合 (%)
三井住友トラスト・アセットマネジメント株式会社	東京都港区芝公園一丁目1番1号	519	4.09
日興アセットマネジメント株式会社	東京都港区赤坂九丁目7番1号	80	0.63
日本証券代行株式会社	東京都中央区日本橋茅場町一丁目2番4号	37	0.30

2 SBIホールディングス株式会社から、2020年5月29日現在の保有株式等を記載した2020年6月1日付の大量保有報告書が関東財務局長に提出されております。その後、保有割合の変更に伴い2020年6月2日現在の保有株式等を記載した2020年6月3日付の変更報告書1が関東財務局長に提出されております。

また、株式会社プロスペクトから保有割合の変更に伴い2020年5月29日現在の保有株式等を記載した2020年6月4日付の変更報告書7が関東財務局長に提出されております。

当行では、これらの大量保有報告書(変更報告書)にて主要株主の異動を確認しましたので、2020年6月4日付で臨時報告書を関東財務局長に提出しております。

なお、上記大株主の状況は2020年3月31日を基準日とした株主名簿に基づき記載をしております。

(7)【議決権の状況】
【発行済株式】

2020年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 28,700	-	権利内容に何ら限定のない 当行における標準となる株 式
完全議決権株式(その他)	普通株式 12,594,800	125,948	同上
単元未満株式	普通株式 77,962	-	同上
発行済株式総数	12,701,462	-	-
総株主の議決権	-	125,948	-

(注)1 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が100株(議決権1個)含まれております。

2 「単元未満株式」欄の普通株式には、当行所有の自己株式3株が含まれております。

【自己株式等】

2020年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数(株)	他人名義所有 株式数(株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合 (%)
(自己保有株式) 株式会社大東銀行	郡山市中町19番1号	28,700	-	28,700	0.22
計	-	28,700	-	28,700	0.22

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	901	544,481
当期間における取得自己株式	77	43,967

(注) 当期間における取得自己株式には、2020年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他()	-	-	-	-
保有自己株式数	28,703	-	28,780	-

(注) 当期間における保有自己株式数には、2020年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び買増請求による売渡の株式数は含めておりません。

3【配当政策】

当行は、地域社会の信頼に応えるべく長期にわたる持続的な経営基盤を確保するため、内部留保の充実に努めるとともに、株主の皆さまへの安定的な配当を継続することを基本方針としております。

こうした基本方針に則り、2020年3月期の配当金につきましては、1株当たり30円とさせていただきますことになりました。

内部留保資金につきましては、引き続き、業務改革(BPR)、IT強化などを目的とした効果的な投資等に充当し、一層の経営基盤の強化と業績の向上を図ってまいりたいと存じます。

当行は、株主総会の決議により剰余金の配当(期末配当金)を支払うこととしております。なお、取締役会の決議により会社法第454条第5項に定める剰余金の配当(中間配当金)をすることができる旨を定款で定めておりますが、当面は、年1回の期末配当を実施させていただく考えでおります。

また、銀行法第18条の定めにより剰余金の配当に制限を受けております。剰余金の配当をする場合には、会社法第445条第4項(資本金の額及び準備金の額)の規定にかかわらず、当該剰余金の配当により減少する剰余金の額に5分の1を乗じて得た額を資本準備金又は利益準備金として計上しております。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
2020年6月26日 定時株主総会決議	380	30

4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

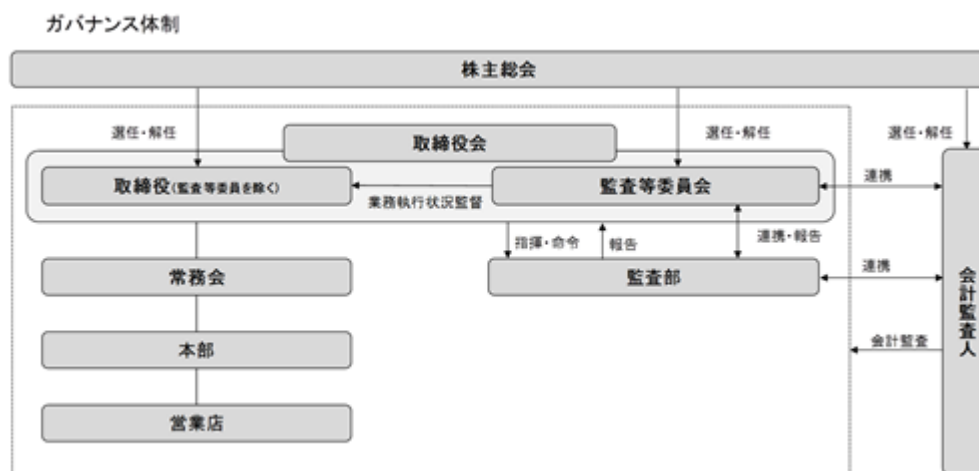
当行は、「共創力と提案力で地域の豊かな未来を実現する」を経営理念として掲げております。

経営理念を実現するためには、地域のお取引先の悩みに寄り添い、信頼関係のもと共に新たな事業価値を創造していくため、迅速かつ機動的に経営の重要事項を決定していく必要があるものと認識しております。同時に監督・牽制機能を維持・強化することで、持続的な成長と中長期的な企業価値向上を図ってまいります。

当行は、迅速かつ機動的に経営の重要事項を決定するガバナンス体制を構築し、監督・牽制機能を維持・強化しつつガバナンス体制のスリム化を実現することを目的に、2020年6月26日開催の第115期定時株主総会における決議により、監査等委員会設置会社へ移行いたしました。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当行の提出日現在における企業統治の体制の模式図は、以下のとおりであります。



a. 企業統治の体制の概要

当行は、監査等委員会設置会社への移行に伴い更なる監査体制の強化・充実により、コーポレート・ガバナンスの強化を図っております。また、経営規律の強化を図るとともに、透明性をより一層高めるため、社外取締役4名を選任しております。

取締役会は取締役（監査等委員である取締役を除く。）4名、及び監査等委員である取締役5名（うち社外取締役4名）計9名（男性8名、女性1名）で構成され、原則月1回開催し、取締役会の付議基準に基づく重要案件の決定、さらには業務執行状況の監督を行っております。このほか、迅速かつ機動的に経営の重要事項を決定し業務を執行するために、執行役員制度を採用しております。

また、常勤の取締役（監査等委員である取締役を含む。）及び執行役員で構成する常務会を原則週1回開催し、重要案件の十分な審議、業務執行への適切な対応を行っております。取締役会、常務会ともその機能を十分に発揮するため、機動的、弾力的な開催に努めております。

なお、当行は、迅速な意思決定と機動的な業務執行の実現のため、定款において、取締役会の決議によって重要な業務執行の決定の全部又は一部を取締役に委任することができる旨を定めております。

また、監査等委員5名中4名は、会社法第2条第15号に定める社外取締役であり、うち1名は監査機能の強化のため弁護士を選任しております。監査等委員会による活動の実効性を確保するためには、監査等の環境の整備や重要社内会議への出席等による円滑な社内の情報収集、内部監査部門等との緊密な連携及び内部統制システムの日常的な監視が必要と判断し、常勤監査等委員を選定しております。監査等委員は、取締役の業務執行状況を監督して適切な助言・提言を行っているほか、常務会には常勤監査等委員が出席して有効かつ適切な監査が行われるようにしております。

機関ごとの構成員は次のとおりであります。(は議長を表す。)

役職名	氏名	取締役会	常務会	監査等委員会
取締役社長	鈴木 孝雄			
常務取締役	岡 安廣			
常務取締役	三浦 謙一			
取締役	大里 裕昭			
取締役監査等委員(常勤)	渡辺 宏和			
取締役監査等委員 (社外取締役)	清水 紀男			
取締役監査等委員 (社外取締役)	松本 三加			
取締役監査等委員 (社外取締役)	菅野 裕之			
取締役監査等委員 (社外取締役)	佐藤 親			
常務執行役員	芳賀 良			
常務執行役員	古川 光雄			
常務執行役員	村上 浩			

b. 当該企業統治の体制を採用する理由

当行のコーポレート・ガバナンス体制は監査等委員会設置会社を選択しており、取締役の3分の1を社外取締役として招聘することで、経営の透明性の確保に努めております。また、監査等委員である取締役に取締役会における議決権を付与することにより、経営への監督・牽制機能を維持・強化しつつ、迅速かつ機動的に経営の重要事項を決定するガバナンス体制を構築できるものと考えております。

企業統治に関するその他の事項

a. 内部統制システムの整備の状況

当行ではコンプライアンス(法令等遵守)を経営の最重要課題のひとつと位置づけ、以下のとおり、「内部統制システムに関する基本方針」を定め、内部統制システムに関する基本的な考え方を示すとともに、各種内部管理体制の整備に努めております。

1. 取締役・使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- (1) 取締役会において「コンプライアンス基本方針」を制定し、その周知徹底を図る。
- (2) 行内のコンプライアンスに関する情報を一元的に管理する部署を経営部とする。
- (3) 本部及び営業店にコンプライアンス責任者を配置し、コンプライアンス遵守状況のモニタリング、コンプライアンス・マインド醸成のための啓蒙活動等を実施する。
- (4) 法務・コンプライアンス委員会を設置し、コンプライアンスに関する施策の検討、啓蒙・教育、状況把握等について定期的に検討・協議する。
- (5) 不祥事件の未然防止のため、使用人の人事ローテーション及び連続休暇制度を実施する。
- (6) 取締役会において「反社会的勢力への対応に関する基本方針」を制定し、反社会的勢力に対しては、毅然とした態度で臨み、不当要求は断固として拒絶する。
- (7) 取締役会において「マネー・ロンダリング及びテロ資金供与の防止に関する基本方針」を制定し、マネー・ロンダリング及びテロ資金供与の防止のための実効的なリスク管理態勢を確立する。

2. 取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

行内の文書の作成、保存及び管理について、「文書規程」に基づき、適正に保存及び管理する。

3. 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- (1) 取締役会において「リスク管理の基本方針」及びリスク管理に係る重要な規程等を制定し、適切なリスク管理を行う。
- (2) 銀行全体のリスクを統合的に管理・コントロールする部署として、経営部(リスク担当)を設置するほか、リスク管理委員会を設置し、各種リスクの評価、モニタリング、限度枠の設定・管理等について検討・協議する。

- (3)内部監査を行う部署として、監査部を設置し、監査方針、内部監査計画を取締役会で策定して実施する。
4. 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
- (1)取締役及び使用人の職務の執行が効率的になされるよう、「社則」及び「事務規程」を制定する。
 - (2)取締役は会社法及び定款の定めに基づき、取締役会の委任を受けた範囲において、重要な業務執行（会社法第399条の13第5項各号に掲げる事項を除く。）の決定の全部又は一部を行うことができる。
 - (3)迅速かつ機動的に経営の重要事項を決定し業務を執行するために、執行役員を設置する。
5. 当行及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
- (1)子会社の取締役等の職務の執行に係る事項の当行への報告に関する体制
当行は、子会社の経営内容を的確に把握するため「関連会社管理規程」を制定し、協議・承認事項や報告事項を明確化する。
 - (2)子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制
当行は「関連会社管理規程」に基づき、子会社が行うリスク管理上の重要な事項については、事前に協議し、主管部及び関係部において適切な管理・指導を行う。
 - (3)子会社の取締役等の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制
子会社が策定する経営方針は、当行の主管部にて事前に協議する。
当行は、円滑な子会社相互の活動と業務上の諸問題につき協調を促進するため、必要ある場合には、関連会社会議を開催する。
 - (4)子会社の取締役等及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制
子会社においても、「コンプライアンス計画」及び「コンプライアンス・マニュアル」の規程を具備させる。
当行は「内部監査規程」に基づき、法令等に抵触しない範囲内で、子会社の業務執行状況について内部監査を実施する。
6. 監査等委員会の職務を補助すべき使用人に関する事項
- (1)監査等委員の職務を補助するため、監査部内に監査等委員会事務局を設置する。
 - (2)監査等委員会事務局の人員は、監査等委員会と協議のうえ、必要な人員を配置する。
7. 監査等委員の職務を補助すべき使用人の取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの独立性及び当該使用人に対する監査等委員の指示の実効性の確保に関する事項
- (1)監査等委員会事務局に所属する使用人は、監査等委員会事務局の業務を行うにあたって、監査等委員以外の者の指揮命令を受けない。
 - (2)監査等委員会事務局に所属する使用人の人事異動や評価等については、監査等委員会の事前の同意を得る。
8. 当行並びに子会社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び使用人が当行の監査等委員会に報告をするための体制その他の監査等委員会への報告に関する体制
- (1)当行並びに子会社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び使用人は、法令等の違反行為、当行に著しい損害を及ぼすおそれのある事実、銀行法に定める不祥事件が発生した場合、速やかに当行の監査等委員会へ報告することとする。
 - (2)「公益通報者保護規程」において、当行及び子会社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び使用人は、組織的又は個人的な法令違反行為等に関して、当行の監査等委員会へ報告することができる。
9. 前項の報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
「公益通報者保護規程」において、通報者に対して当該通報をしたことを理由に解雇その他いかなる不利益取扱いも行わないことを定める。
10. 監査等委員の職務の執行について生ずる費用の前払い又は償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項
監査等委員会は、「監査等委員会規程」に基づき、監査等委員の職務の執行上必要と認められる監査費用について予算の決議を行う。

11. その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制

- (1) 監査等委員は、会計監査のみならず、取締役会、常務会その他の重要な会議へ出席し、必要あると認められるときは意見を述べ、そのほか往査による業務監査を実施する。
- (2) 代表取締役及び関係する取締役は、当行が対処すべき課題、監査等委員会による監査の環境整備の状況、監査上の重要課題等について、取締役会等において定期的に監査等委員と意見交換を行う。
- (3) 監査等委員会は、内部監査部門等と緊密な連携を保ち、内部管理体制における課題等について定期的に意見交換を行い、内部監査の結果等の報告を受ける。

b. リスク管理体制の整備の状況

当行は、リスク管理を経営の最重要課題のひとつとして位置づけ、取締役会において「リスク管理の基本方針」を定め、リスク管理の一層の強化・充実に取り組んでおります。

リスク管理体制については、経営部において銀行全体のリスクの統合的管理に努めるとともに、リスク管理の基本方針に則ってリスクを適切に管理する「リスク管理委員会」を設置しております。

c. 責任限定契約の内容の概要

当行は会社法第427条第1項の規定により取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）との間に、善意にしてかつ重大な過失がないときは損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく賠償責任の限度額は、100万円又は法令が規定する最低責任限度額のいずれか高い額であります。

d. コーポレート・ガバナンスの充実に向けた取組みの最近1年間における実施状況

イ. 2020年3月期は15回の取締役会を開催しております。

ロ. 2020年3月期は43回の常務会を開催しております。

ハ. 2020年3月期は15回の監査役会を開催しております。

ニ. 2020年3月期において、「透明性のある、開かれた経営」を実践し、積極的な情報開示とコミュニケーション向上を目的として、株主及びお取引先向けに「決算説明会」を福島県内4会場で開催いたしました。

e. 取締役の定数

当行の取締役（監査等委員であるものを除く。）は7名以内、監査等委員である取締役は5名以内とする旨、定款に定めております。

f. 取締役の選任の決議要件

当行は、株主総会の決議による取締役の選任にあたっては、監査等委員である取締役とそれ以外の取締役とを区分して選任する旨を定款に定めております。

また、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主の出席を要する旨、及び株主総会の決議は、法令又は定款に別段の定めがある場合を除き、出席した議決権を行使することができる株主の議決権の過半数をもって行う旨定款に定めております。

g. 取締役会で決議できる株主総会決議事項

イ. 当行は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己株式を取得することができる旨を定款に定めております。これは、機動的に自己株式の取得を行うことを目的とするものであります。

ロ. 当行は、取締役会の決議によって毎年9月30日の最終の株主名簿に記載、又は記録された株主又は登録株式質権者に対し、会社法第454条第5項に定める剰余金の配当（中間配当）をすることができる旨を定款に定めております。これは、株主への機動的な利益還元を行うことを目的とするものであります。

h. 株主総会の特別決議要件

会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨定款に定めております。これは株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性8名 女性1名 (役員のうち女性の比率11.1%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
取締役社長 代表取締役	鈴木 孝雄	1953年11月15日生	1976年4月 当行入行 1996年2月 同 うねめ支店長 1998年3月 同 本店営業部副部長 2001年4月 同 二本松支店長 2003年3月 同 朝日エリア長兼朝日支店長 2004年6月 同 常務取締役 2008年6月 同 専務取締役 2010年6月 同 取締役社長(現職)	2020年6月 から1年	110
常務取締役 代表取締役	岡 安廣	1955年11月30日生	1974年4月 当行入行 1999年3月 同 石川支店長 2001年4月 同 川俣支店長 2003年3月 同 白河支店長 2004年6月 同 債権管理部長 2008年7月 同 執行役員審査部長 2010年6月 同 取締役審査部長 2013年6月 同 常務取締役(現職)	2020年6月 から1年	33
常務取締役 代表取締役 経営部長	三浦 謙一	1958年1月26日生	1980年4月 株式会社日本長期信用銀行 (現㈱新生銀行)入行 2008年7月 同 福岡支店長 2010年11月 株式会社新生銀行から当行へ出向 執行役員経営部長 2012年6月 当行取締役経営部長 2012年7月 同 取締役営業企画部長 2014年7月 同 取締役経営部長 2015年8月 同 取締役システム部長兼事務部長 2016年6月 同 常務取締役システム部長兼事務 部長 2017年7月 同 常務取締役本店営業部長 2019年4月 同 常務取締役経営部長(現職)	2020年6月 から1年	32
取締役 証券国際部長	大里 裕昭	1957年12月26日生	1981年4月 当行入行 2001年4月 同 証券国際部主任調査役 2003年3月 同 総合企画部主任調査役 2004年6月 同 経営部主任調査役 2005年7月 同 経営部副部長 2008年7月 同 証券国際部長 2013年6月 同 執行役員証券国際部長 2017年6月 同 取締役証券国際部長(現職)	2020年6月 から1年	29
取締役 監査等委員	渡辺 宏和	1961年3月21日生	1983年4月 当行入行 2003年8月 同 西川支店長 2005年7月 同 総務部副部長 2008年7月 同 総務部長 2012年7月 同 東京支店長兼東京事務所長 2014年7月 同 総務部長 2015年6月 同 執行役員総務部長 2020年6月 同 取締役監査等委員(現職)	2020年6月 から2年	18

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (百株)
取締役 監査等委員	清水紀男	1957年7月24日生	1981年4月 日本銀行入行 2004年2月 同 青森支店長 2007年5月 同 神戸支店長 2009年5月 同 総務人事局審議役 2010年6月 同 発券局長 2013年4月 同 総務人事局長 2014年6月 同 退職 2014年7月 株式会社社商工組合中央金庫常務執行役員 2015年6月 同 取締役常務執行役員 2018年6月 同 退任 2018年6月 ときわ総合サービス株式会社取締役 2019年6月 同 代表取締役社長(現職) 2020年6月 当行取締役監査等委員(現職)	2020年6月 から2年	-
取締役 監査等委員	松本三加	1974年2月3日生	2000年4月 弁護士登録(第二東京弁護士会) 桜丘法律事務所入所 2001年4月 紋別ひまわり基金法律事務所(旭川 弁護士会)所長 2006年9月 カリフォルニア大学バークレー校 (日弁連派遣)客員研究員 2007年9月 相馬ひまわり基金法律事務所(福島 県弁護士会)所属弁護士 2010年9月 浜通り法律事務所(福島県いわき 市)開所(現職) 2015年6月 当行社外監査役 2020年6月 同 取締役監査等委員(現職)	2020年6月 から2年	1
取締役 監査等委員	菅野裕之	1954年12月15日生	1978年4月 福島県庁入庁 2005年4月 同 財務領域財政グループ参事 2007年4月 同 総務部政策監 2009年4月 公立大学法人会津大学理事(総務・ 財務担当)兼事務局長 2011年6月 福島県庁 会計管理者兼出納局長 2012年4月 同 保健福祉部長 2014年3月 同 退職 2014年4月 公益財団法人ふくしま自治研修セン ター代表理事兼所長 2018年3月 同 退職 2019年6月 当行社外監査役 2020年6月 同 取締役監査等委員(現職)	2020年6月 から2年	-
取締役 監査等委員	佐藤親	1956年5月10日生	1980年4月 郡山市役所入所 2005年4月 同 財務部財政課長 2008年4月 同 教育委員会事務局参事兼総務課長 2011年5月 同 議会事務局長 2013年4月 同 教育委員会事務局生涯学習部長 2015年4月 同 総務部長 2017年3月 同 退職 2017年4月 社会福祉法人郡山市社会福祉事業団常 務理事 2018年4月 同 理事長 2020年3月 同 退任 2020年6月 当行取締役監査等委員(現職)	2020年6月 から2年	-
計					223

(注) 1 取締役のうち、清水紀男、松本三加、菅野裕之及び佐藤親は、会社法第2条第15号に定める社外取締役にあり、東京証券取引所に対し、独立役員として届け出ております。
2 社外取締役松本三加の戸籍上の氏名は渡邊三加ですが、職業上使用している氏名で表記しております。
3 当行は、迅速かつ機動的に経営の重要事項を決定し業務を執行するために、2020年6月より執行役員制度を拡充しております。
2020年6月26日現在の執行役員の構成は以下のとおりであります。
執行役員 3名

社外役員の状況

a. 監査等委員である社外取締役の員数 4名

b. 当行と当行の社外取締役（監査等委員である社外取締役を含む）との人的関係、資本的关系又は取引関係その他の利害関係の概要

当行は、社外取締役（監査等委員である社外取締役を含む）との間に預金取引がありますが、取引条件及び取引条件の決定方針等は一般の取引と同様であります。

なお、資本的关系としては、社外取締役松本三加は当行株式を保有しており、その保有株式数は、「役員一覧」の所有株式数の欄に記載のとおりであります。

c. 企業統治において果たす機能及び役割並びに選任するための当行からの独立性に関する基準又は方針の内容及び選任状況に関する会社の考え方

社外取締役清水紀男は、日本銀行において、長年にわたって金融業務に携わっており、銀行業務に精通した専門的知見を有しております。この実績を踏まえ、当行意思決定の健全性と透明性に寄与し、経営の監督強化に活かしていただけるものと判断しております。

社外取締役松本三加は、弁護士として長年培ってきた知識・経験に基づき、独立かつ中立の立場から客観的に意見を表明していただけるなど、当行の業務執行を監督するのに適任であると判断しております。

社外取締役菅野裕之は、福島県庁において、長年にわたって財務・財政・総務領域に携わっており、銀行業務にも通ずる豊富な経験・知識・見識を有しております。これらの実績に基づき、独立・中立の立場から客観的に意見を表明していただけるなど、当行の業務執行を監督するのに適任であると判断しております。

社外取締役佐藤 親は、郡山市役所において、長年にわたって財務、総務領域の行政に携わっており、銀行業務にも通ずる豊富な経験、知識、見識を有しております。これらの実績に基づき、独立・中立の立場から客観的に意見を表明していただけるなど、当行の業務執行を監督するのに適任であると判断しております。

また、上記の社外取締役はいずれも一般株主と利益相反が生じるおそれはなく、独立性を確保し、その職務を十分に果たすことが可能であると判断しております。

なお、社外取締役を選任するための独立性に関する基準は、原則として、現在又は最近（ ）において次のいずれの要件にも該当しないこととしております。

（イ）当行又は当行関連会社の業務執行者

（ロ）当行又は当行関連会社の主要な取引先、その者が法人等である場合にはその業務執行者

（ハ）当行又は当行関連会社を主要な取引先とする者、その者が法人等である場合にはその業務執行者

（ニ）当行又は当行関連会社から役員報酬以外に、過去3年平均で年間10万円以上の金銭その他の財産を得ているコンサルタント、会計専門家又は法律専門家

（ホ）当行又は関連会社から、過去3年平均で年間10万円以上の寄付等を受けている者、その者が法人等である場合にはその業務執行者

（ヘ）当行又は当行関連会社の主要株主（総議決権の10%以上）、その者が法人等である場合にはその業務執行者

（ト）上記（イ）～（ヘ）の近親者（二親等以内の親族）

「最近」の定義

実質的に現在と同視できるような場合をいい、例えば、社外取締役として選任する株主総会の議案の内容が決定された時点において該当していた場合等を含む。

社外取締役（監査等委員である社外取締役を含む）による監督又は監査と内部監査、監査等委員会監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

監査等委員である社外取締役は、内部監査及び監査等委員会監査並びに会計監査の実施状況、内部統制部門の活動状況について報告を受けております。

監査等委員である社外取締役は、上記の実施状況及び活動状況の報告を受け、独立した立場から必要な発言を適宜行い、その職責を果たしております。

(3) 【監査の状況】

監査等委員会監査の状況

a. 監査等委員会監査の組織、人員、及び手続

監査等委員会（5名（常勤1名、非常勤4名））は、監査等委員会が定めた監査等委員会監査等基準に基づき、監査方針や監査計画等に従い監査を行っております。なお、監査の実効性を高め、監査業務を円滑に執行するための体制を確保するために、補助使用人として監査部所属の職員1名を配置しております。

b. 監査役及び監査役会の活動状況

当行は、2020年6月26日開催の定時株主総会において定款変更が決議されたことにより、同日付をもって監査等委員会設置会社に移行しておりますが、2019年度については移行前であり、監査役及び監査役会の活動状況について記載しております。

監査役会は、毎月1回及び必要に応じて随時開催しており、当事業年度において監査役会を15回開催しております。

監査役会における主な検討事項は、監査方針・監査計画及び職務分担、内部統制システムの整備・運用状況、業務執行状況、会計監査人の評価及び再任・不再任、会計監査人の監査の方法及び結果の相当性等です。

個々の監査役の出席状況は、次のとおりであります。

氏名	役職名	開催回数	出席回数
佐久間 忠	常勤監査役	15回	15回（100%）
遠山 浩	非常勤（社外監査役）	15回	15回（100%）
阿久津 文作	非常勤（社外監査役）	5回	5回（100%）
松本 三加	非常勤（社外監査役）	15回	15回（100%）
菅野 裕之	非常勤（社外監査役）	10回	10回（100%）

（注）1. 阿久津文作は、2019年6月に監査役を退任しております。

2. 菅野 裕之は、2019年6月に監査役に就任しております。

常勤監査役は、監査役会が定めた監査方針・監査計画及び職務分担に従い、取締役、内部監査部門その他の使用人、子会社の取締役、会計監査人等と緊密な連携を図り、情報の収集及び監査環境の整備に努めております。また、取締役会その他重要な会議への出席、重要書類の閲覧、本部及び営業店への往査、子会社の調査等により情報を収集・検証し、監査役会において結果を報告するとともに、各監査役と情報の共有化を図っております。

非常勤の社外監査役は、その独立性とそれぞれの専門的知見を活かし、各監査役と協力しながら、取締役会への出席、監査役会での中立の立場からの客観的な意見による議論を通じて、常勤監査役とともに監査の実効性を確保しております。

また、監査役会は、代表取締役、非常勤の社外取締役、会計監査人と定期的に詳細な情報・意見交換を行い、監査の実効性を高めております。

内部監査の状況

a. 内部監査の組織、人員及び手続

当行の内部監査は、監査部（6名在籍）が担当しており、本部・営業店の業務を対象として行う臨店監査、並びに自己査定及び償却・引当結果を検証する自己査定監査を行うとともに、内部監査結果については、取締役会及び監査等委員会に報告しております。

b. 内部監査、監査等委員会監査及び会計監査の相互連携並びにこれらの監査と内部統制部門との関係

監査等委員会は、監査等委員会監査等基準に基づき、監査方針や監査計画等に従い監査を行っております。監査等委員会は、内部監査結果の報告を受けるとともに、必要に応じ監査部と連携した業務監査も実施しております。さらに、監査等委員会及び監査部は、会計監査人と定期的に監査結果の報告を基に意見交換を行うなど緊密な連携を保ち、効率的な監査に努めております。

また、これらの監査は、内部統制部門とも緊密な連携を保ち、良質な企業統治体制の確立に努めております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

EY新日本有限責任監査法人

b. 継続監査期間

14年

b. 業務を執行した公認会計士

指定有限責任社員 業務執行社員 富樫 健一

指定有限責任社員 業務執行社員 久保 暢子

c. 監査業務に係る補助者の構成

公認会計士 10名、その他 12名

d. 監査法人の選定方針と理由

当行は、2020年6月26日開催の第115期定時株主総会において、監査役設置会社から監査等委員会設置会社に移行しております。このため、会計監査人の選任及び解任並びに会計監査人を再任しないことに関する議案の内容は監査等委員会が決定するものであります。

監査等委員会は、「外部会計監査人の評価及び選定基準」を策定し、会計監査人候補者から、監査法人の概況、監査の実施体制等、監査報酬の見積額について書面を入手し、面談、質問等を通じて選定することとしております。

また、会計監査人の独立性及び審査体制その他の職務の実施に関する体制が十分でないと認められた場合は、監査等委員会が会計監査人の解任又は不再任を決定する方針であります。

なお、2019年度については移行前であり、会計監査人の選任及び解任並びに会計監査人を再任しないことに関する議案の内容は、監査役会にて決定しております。

e. 監査等委員及び監査等委員会による監査法人の評価

監査等委員会は、「外部会計監査人の評価及び選定基準」を策定し、監査法人の品質管理、監査チーム、監査報酬等、監査等委員とのコミュニケーション、経営者等との関係、不正リスクについて評価を行っております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)	監査証明業務に基づく報酬 (百万円)	非監査業務に基づく報酬 (百万円)
提出会社	40	-	40	-
連結子会社	-	-	-	-
計	40	-	40	-

b. 監査公認会計士等と同一のネットワークに属する組織に対する報酬

該当事項はありません。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

該当事項はありません。

e. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

監査等委員会設置会社移行前の監査役会において、会計監査人の監査計画の内容、会計監査の職務遂行状況及び報酬見積りの算出根拠等が適切であるかどうかについて必要な検証を行ったうえで、会計監査人の報酬等の額は妥当と判断し、同意をしております。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針

当行は役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針は定めておりません。

当行の役員報酬は、株主総会で承認された報酬等の総額の範囲内において、業績や経営内容、経済情勢等を考慮し、取締役の報酬については取締役会の決議により、監査役の報酬については監査役の協議により決定しております。役員賞与は、当行グループの業績等を勘案して決定しており、株主総会で承認された報酬等の総額の範囲内において、取締役については取締役会の決議により、監査役については監査役の協議により決定しております。

また、監査等委員会設置会社移行後の役員報酬は、取締役（監査等委員である取締役を除く。）の報酬については取締役会の決議により、監査等委員である取締役の報酬については監査等委員会の協議により決定しております。役員賞与は、当行グループの業績等を勘案して決定しており、株主総会で承認された報酬等の総額の範囲内において、取締役（監査等委員である取締役を除く。）については取締役会の決議により、監査等委員である取締役については監査等委員会の協議により決定しております。

なお、役員の報酬等に関する株主総会の決議内容につきましては以下のとおりであります。

イ．決議年月日 2020年6月26日（第115期定時株主総会）

ロ．決議内容

取締役（監査等委員である取締役を除く。）の報酬額を年額180百万円以内、監査等委員である取締役の報酬額を年額66百万円以内に改定する。

なお、取締役（監査等委員である取締役を除く。）の報酬額には、従来どおり使用人兼務取締役の使用人分給とは含まないものとする。

ハ．当該決議時における役員の員数

取締役（監査等委員である取締役を除く。）7名以内、監査等委員である取締役 5名以内

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

当事業年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

以下に記載する役員の報酬は、2019年度における報酬等の額であります。

なお、当行は、2020年6月26日開催の第115期定時株主総会における決議により、監査等委員会設置会社へ移行しており、本有価証券報告書提出日現在において監査役を選任しておりません。

当事業年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

役員区分	員数	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別			
			固定報酬	業績連動報酬	退職慰労金	その他
取締役（社外取締役を除く）	7	78	78	-	-	0
監査役（社外監査役を除く）	1	11	11	-	-	0
社外役員	6	16	16	-	-	-

（注） 連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、役員ごとの連結報酬等の総額等は記載しておりません。

使用人兼務役員の使用人分給のうち重要なもの

当事業年度（自2019年4月1日 至2020年3月31日）

総額（百万円）	対象となる役員の員数（人）	内容
34	5	固定報酬としての給与であります。

役員の報酬等の額の決定過程における、取締役会及び委員会等の活動内容

取締役の報酬（監査等委員である取締役を除く。）については、業績や経営内容、経済情勢等を踏まえ、責任の度合い等を考慮して、人事委員会において審議し、独立社外役員に対して取締役会に先立ち審議結果を説明し、適切な助言を得たうえで取締役会において決定しております。また、監査等委員である取締役の報酬については、監査等委員会の協議により決定しております。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

保有目的が純投資目的である投資株式とは、専ら株式の価値の変動又は株式に係る配当によって利益を受けることを目的とする投資株式のことをいいます。また、純投資目的以外の目的である投資株式とは、地域金融機関として取引先との安定的・長期的な取引関係の維持・強化や、当行の事業戦略上の事由などから保有の適否を総合的に判断して保有する意義が認められた投資株式のことをいいます。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

イ. 保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当行は、経営政策又は営業政策に基づき、当行の中長期的な企業価値向上や取引先との安定的・長期的な関係構築・維持・強化等に資すると判断される場合に、当該取引先等の株式を保有します。保有意義及び経済合理性、将来の見通しなどを十分検証し、保有に見合った価値が認められない場合には、投資先企業の十分な理解を得たうえで縮減を進めます。

政策保有株式については、保有目的に応じた便益や投資先の財務・業績等のリスク等が資本コストに見合っているか、将来の見通し等も踏まえて、投資先ごとの保有意義の妥当性を定期的にリスク管理委員会で検証したうえで、保有方針を取締役会において決定しております。

2020年3月期につきましては、検証の結果、保有する全ての株式において保有意義の妥当性が認められ、中長期的な企業価値の向上に資するものであることを確認しました。また、取引から得られる利益や配当利回りの合計は、政策保有株式全体について資本コストを上回っております。

ロ. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
上場株式	14	1,986
非上場株式	47	1,157

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
上場株式	-	-	-
非上場株式	1	79	業務上の協力関係の維持・強化を図るため

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
上場株式	-	-
非上場株式	2	3

八. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報
(特定投資株式)

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果	当行の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額(百万円)	貸借対照表計上額(百万円)		
株式会社 東邦銀行	2,482,557	2,482,557	当行の主たる営業基盤である福島県に本店を置く地方銀行であり、地域における金融サービスの維持等を目的に連携強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	670	734		
株式会社 幸楽苑ホールディングス	266,825	266,825	良好な関係の維持・強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	363	706		
SOMPOホールディングス 株式会社	75,012	75,012	保険商品の窓口販売や海外進出企業の支援業務の提携など、協力関係の維持・強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	250	307		
株式会社 大光銀行	142,400	142,400	当行が採用する共同アウトソーシングサービス「NEXTBASE」加盟行であり、連携強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	206	232		
東日本旅客鉄道 株式会社	14,000	14,000	地域との関係が深く、地域活性化などを目的に連携強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	無
	114	149		
株式会社 大和証券グループ本社	227,570	227,570	当行の幹事証券会社であり、協力関係の維持・強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	95	122		
常磐開発 株式会社	15,000	15,000	良好な関係の維持・強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	70	77		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果	当行の株式の保有の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額(百万円)	貸借対照表計上額(百万円)		
株式会社 栃木銀行	310,000	310,000	当行が採用する共同アウトソーシングサービス「NEXTBASE」加盟行であり、連携強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	48	72		
株式会社 トマト銀行	42,400	42,400	当行が採用する共同アウトソーシングサービス「NEXTBASE」加盟行であり、連携強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	44	44		
アレンザホールディングス 株式会社	61,383	61,383	良好な関係の維持・強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	43	57		
株式会社 高知銀行	60,000	60,000	当行が採用する共同アウトソーシングサービス「NEXTBASE」加盟行であり、連携強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	38	48		
株式会社 ジャックス	10,000	10,000	信販会社大手であり、消費者ローンの業務提携など協力関係の維持・強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	18	17		
株式会社 T B K	27,300	27,300	良好な関係の維持・強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	12	11		
株式会社 朝日ラバー	20,000	20,000	良好な関係の維持・強化を図るために保有しております。 保有効果としては、2019年度において、資本コストを考慮した収益性の定量的な保有基準を充足いたしました。	有
	10	15		

(みなし保有株式)
該当ありません。

保有目的が純投資目的である投資株式

区分	当事業年度		前事業年度	
	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
上場株式	39	650	46	957
非上場株式	1	211	1	211

区分	当事業年度		
	受取配当金の 合計額(百万円)	売却損益の 合計額(百万円)	評価損益の 合計額(百万円)
上場株式	22	30	62
非上場株式	4	-	-

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したものの
該当ありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したものの
該当ありません。

第5【経理の状況】

1. 当行の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1976年大蔵省令第28号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(1982年大蔵省令第10号)に準拠しております。
2. 当行の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(1963年大蔵省令第59号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(1982年大蔵省令第10号)に準拠しております。
3. 当行は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(自2019年4月1日 至2020年3月31日)の連結財務諸表及び事業年度(自2019年4月1日 至2020年3月31日)の財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人の監査証明を受けております。
4. 当行は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、定期刊行物の購読、監査法人主催のセミナーへの参加等を行うことにより、会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備しております。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
資産の部		
現金預け金	6 38,708	6 49,809
有価証券	6, 11 204,326	6, 11 186,941
貸出金	1, 2, 3, 4, 5, 7 529,979	1, 2, 3, 4, 5, 7 538,006
外国為替	440	450
リース債権及びリース投資資産	2,255	2,298
その他資産	6 2,993	6 2,929
有形固定資産	9, 10 10,535	9, 10 10,263
建物	1,956	1,901
土地	8 7,930	8 7,930
建設仮勘定	0	-
その他の有形固定資産	646	430
無形固定資産	1,504	969
ソフトウェア	1,381	846
その他の無形固定資産	122	122
退職給付に係る資産	445	397
繰延税金資産	-	109
支払承諾見返	992	1,079
貸倒引当金	2,407	2,599
資産の部合計	789,773	790,655
負債の部		
預金	6 678,653	6 681,221
譲渡性預金	61,530	61,833
借入金	400	470
外国為替	-	0
その他負債	3,501	4,089
賞与引当金	119	125
退職給付に係る負債	1,291	1,278
睡眠預金払戻損失引当金	328	275
偶発損失引当金	139	115
繰延税金負債	336	9
再評価に係る繰延税金負債	8 1,065	8 1,065
支払承諾	992	1,079
負債の部合計	748,358	751,564
純資産の部		
資本金	14,743	14,743
資本剰余金	1,294	1,294
利益剰余金	20,677	21,359
自己株式	48	48
株主資本合計	36,667	37,349
その他有価証券評価差額金	1,929	988
土地再評価差額金	8 1,862	8 1,862
退職給付に係る調整累計額	108	46
その他の包括利益累計額合計	3,900	919
非支配株主持分	848	821
純資産の部合計	41,415	39,090
負債及び純資産の部合計	789,773	790,655

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
経常収益	12,564	12,452
資金運用収益	8,114	7,958
貸出金利息	6,158	5,987
有価証券利息配当金	1,925	1,930
コールローン利息及び買入手形利息	1	-
預け金利息	27	40
その他の受入利息	1	0
役務取引等収益	2,861	2,913
その他業務収益	1,016	1,100
その他経常収益	572	479
貸倒引当金戻入益	130	-
償却債権取立益	79	81
その他の経常収益	362	398
経常費用	11,697	10,986
資金調達費用	162	148
預金利息	149	134
譲渡性預金利息	8	10
借入金利息	4	4
役務取引等費用	913	1,026
その他業務費用	1,442	793
営業経費	1,860	1,807
その他経常費用	575	943
貸倒引当金繰入額	-	385
その他の経常費用	2,575	2,557
経常利益	867	1,466
特別利益	1,176	14
固定資産処分益	1,176	14
特別損失	81	27
固定資産処分損	81	27
税金等調整前当期純利益	1,963	1,452
法人税、住民税及び事業税	528	412
法人税等調整額	167	33
法人税等合計	695	378
当期純利益	1,267	1,073
非支配株主に帰属する当期純利益	20	11
親会社株主に帰属する当期純利益	1,246	1,062

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
当期純利益	1,267	1,073
その他の包括利益	1,991	1,301
その他有価証券評価差額金	1,004	2,954
退職給付に係る調整額	13	62
包括利益	2,258	1,942
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	2,216	1,917
非支配株主に係る包括利益	41	24

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	14,743	1,294	19,219	47	35,210
当期変動額					
剰余金の配当			380		380
親会社株主に帰属する当期純利益			1,246		1,246
自己株式の取得				0	0
土地再評価差額金の取崩			591		591
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	1,457	0	1,456
当期末残高	14,743	1,294	20,677	48	36,667

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	945	2,453	121	3,521	809	39,540
当期変動額						
剰余金の配当						380
親会社株主に帰属する当期純利益						1,246
自己株式の取得						0
土地再評価差額金の取崩						591
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	983	591	13	379	39	418
当期変動額合計	983	591	13	379	39	1,875
当期末残高	1,929	1,862	108	3,900	848	41,415

当連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	14,743	1,294	20,677	48	36,667
当期変動額					
剰余金の配当			380		380
親会社株主に帰属する当期純利益			1,062		1,062
自己株式の取得				0	0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	-	682	0	682
当期末残高	14,743	1,294	21,359	48	37,349

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	1,929	1,862	108	3,900	848	41,415
当期変動額						
剰余金の配当						380
親会社株主に帰属する当期純利益						1,062
自己株式の取得						0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	2,918		62	2,980	26	3,007
当期変動額合計	2,918	-	62	2,980	26	2,325
当期末残高	988	1,862	46	919	821	39,090

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	1,963	1,452
減価償却費	1,036	979
貸倒引当金の増減()	369	192
賞与引当金の増減額(は減少)	42	5
退職給付に係る資産の増減額(は増加)	11	47
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	50	13
睡眠預金払戻損失引当金の増減()	3	52
偶発損失引当金の増減額(は減少)	6	23
資金運用収益	8,114	7,958
資金調達費用	162	148
有価証券関係損益()	632	219
為替差損益(は益)	0	0
固定資産処分損益(は益)	1,095	13
貸出金の純増()減	10,196	8,027
預金の純増減()	13,180	2,568
譲渡性預金の純増減()	175	303
借入金(劣後特約付借入金を除く)の純増減()	15	70
預け金(日銀預け金を除く)の純増()減	92	137
外国為替(資産)の純増()減	516	9
外国為替(負債)の純増減()	-	0
リース債権及びリース投資資産の純増()減	354	42
資金運用による収入	8,347	8,155
資金調達による支出	184	167
その他	117	866
小計	20,772	1,572
法人税等の支払額	346	684
営業活動によるキャッシュ・フロー	21,118	2,256
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	30,169	38,051
有価証券の売却による収入	30,723	27,884
有価証券の償還による収入	21,800	24,224
有形固定資産の取得による支出	253	133
無形固定資産の取得による支出	138	101
有形固定資産の売却による収入	2,150	62
その他	0	8
投資活動によるキャッシュ・フロー	24,111	13,876
財務活動によるキャッシュ・フロー		
配当金の支払額	376	377
非支配株主への配当金の支払額	2	2
自己株式の取得による支出	0	0
財務活動によるキャッシュ・フロー	379	380
現金及び現金同等物に係る換算差額	0	0
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	2,613	11,238
現金及び現金同等物の期首残高	34,465	37,079
現金及び現金同等物の期末残高	1 37,079	1 48,318

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社 2社

主要な連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため省略しました。

(2) 非連結子会社

該当ありません。

2 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社

該当ありません。

(2) 持分法適用の関連会社

該当ありません。

(3) 持分法非適用の非連結子会社

該当ありません。

(4) 持分法非適用の関連会社

該当ありません。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

すべての連結子会社の事業年度末日と連結決算日は一致しております。

4 開示対象特別目的会社に関する事項

該当ありません。

5 会計方針に関する事項

(1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。

(2) 有価証券の評価基準及び評価方法

有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、その他有価証券については原則として連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)、ただし、時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

(4) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産

有形固定資産は、定率法(ただし、1998年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))並びに2016年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法)を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 : 8年~50年

その他 : 3年~20年

無形固定資産

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。

(5) 貸倒引当金の計上基準

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者（以下「破綻懸念先」という。）に係る債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。上記以外の債権については、主として今後1年間の予想損失額又は今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間又は3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は6,870百万円（前連結会計年度末は7,368百万円）であります。

連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認めた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。

(6) 賞与引当金の計上基準

賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。

(7) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの将来の払戻請求に備えるため、過去の払戻実績に基づく将来の払戻損失見込額を計上しております。

(8) 偶発損失引当金の計上基準

偶発損失引当金は、信用保証協会に対する責任共有制度負担金の支払いに備えるため、過去の実績に基づき、将来の支払見込額を計上しております。

(9) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、過去勤務費用及び数理計算上の差異の費用処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理

数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理

なお、連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(10) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

当行の外貨建資産・負債は、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。

なお、連結子会社は、外貨建資産・負債を保有しておりません。

(11) リース取引の処理方法

（借手）

該当ありません。

（貸手）

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る収益の計上基準は、リース料受取時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。

(12) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。

(13) 消費税等の会計処理

当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

(未適用の会計基準等)

- ・「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2018年3月30日 企業会計基準委員会)
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2018年3月30日 企業会計基準委員会)

(1) 概要

収益認識に関する包括的な会計基準であります。収益は、次の5つのステップを適用し認識されます。

- ステップ1：顧客との契約を識別する。
- ステップ2：契約における履行義務を識別する。
- ステップ3：取引価格を算定する。
- ステップ4：契約における履行義務に取引価格を配分する。
- ステップ5：履行義務を充足した時に又は充足するにつれて収益を認識する。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首から適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額については、現時点で評価中であります。

- ・「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日)
- ・「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 2019年7月4日)
- ・「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)
- ・「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 2020年3月31日)

(1) 概要

国際的な会計基準の定めとの比較可能性を向上させるため、「時価の算定に関する会計基準」及び「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(以下「時価算定会計基準等」という。)が開発され、時価の算定方法に関するガイダンス等が定められました。

時価算定会計基準等は次の項目の時価に適用されます。

- ・「金融商品に関する会計基準」における金融商品

また、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」が改訂され、金融商品の時価のレベルごとの内訳等の注記事項が定められました。

(2) 適用予定日

2022年3月期の期首から適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

影響額については、現時点で評価中であります。

(追加情報)

新型コロナウイルスの感染拡大は、主に貸出金等の信用リスクに影響を及ぼす可能性があります。当該感染拡大は、半年程度で収束し、その後は緩やかな回復に向かうものと想定しております。また、当行の主たる営業基盤である福島県における感染状況や事業性貸出先への訪問等による影響調査の実施状況、さらには、政府、自治体、金融機関が一体となった資金繰り支援等により、貸出金にかかる信用リスクへの影響は限定的であるとの仮定に基づき、当連結会計年度の貸倒引当金を計上しております。

なお、当該仮定には不確実性を有しており、新型コロナウイルス感染症の感染拡大や経済への影響の変化等により、翌年度以降の業績に影響を及ぼす可能性があります。

(連結貸借対照表関係)

1 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
破綻先債権額	377百万円	314百万円
延滞債権額	10,574百万円	10,910百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(1965年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

2 貸出金のうち3カ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
3カ月以上延滞債権額	18百万円	13百万円

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3カ月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

3 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
貸出条件緩和債権額	2,072百万円	2,093百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

4 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
合計額	13,044百万円	13,331百万円

なお、上記1から4に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

5 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	1,359百万円	986百万円

6 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	31,282百万円	30,969百万円
その他資産	5百万円	5百万円
現金預け金	4百万円	4百万円
計	31,293百万円	30,980百万円
担保資産に対応する債務		
預金	671百万円	1,536百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保として、次のものを差し入れております。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
有価証券	12,829百万円	9,170百万円
また、その他資産には、敷金及び保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。		
	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
敷金	116百万円	112百万円
保証金	36百万円	31百万円

7 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
融資未実行残高	58,195百万円	56,713百万円
うち原契約期間が1年以内のもの(又は任意の時期に無条件で取消可能なもの)	47,284百万円	49,413百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内(社内)手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

8 土地の再評価に関する法律(1998年3月31日公布法律第34号)に基づき、当行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日

1998年3月31日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(1998年3月31日公布政令第119号)第2条第1号に定める当該事業用土地の近隣の地価公示法(1969年法律第49号)第6条に規定する標準地について同条の規定により公示された価格、及び第3号に定める当該事業用土地について地方税法(1950年法律第226号)第341条第10号の土地課税台帳又は同条第11号の土地補充課税台帳に登録されている価格に基づいて、奥行価格補正、時点修正、近隣売買事例による補正等合理的な調整を行って算出。

同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の期末における時価の合計額が当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額を下回る金額

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	4,235百万円	4,160百万円

9 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
減価償却累計額	11,177百万円	11,192百万円

10 有形固定資産の圧縮記帳額

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
圧縮記帳額	1,222百万円	1,211百万円
(当該連結会計年度の圧縮記帳額)	(-)	(-)

11 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）による社債に対する保証債務の額

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
	1,362百万円	2,165百万円

(連結損益計算書関係)

1 営業経費には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
給与・手当	3,180百万円	2,978百万円
退職給付費用	183百万円	173百万円
減価償却費	1,036百万円	979百万円
保守管理費	971百万円	935百万円

2 その他の経常費用には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
貸出金償却	231百万円	225百万円
株式等売却損	87百万円	2百万円
株式等償却	118百万円	231百万円

(連結包括利益計算書関係)

1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	1,035	2,568
組替調整額	185	761
税効果調整前	1,220	3,330
税効果額	216	375
その他有価証券評価差額金	1,004	2,954
退職給付に係る調整額		
当期発生額	3	69
組替調整額	16	18
税効果調整前	19	88
税効果額	5	26
退職給付に係る調整額	13	62
その他の包括利益合計	991	3,016

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位:千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度 末株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	12,701	-	-	12,701	
自己株式					
普通株式	27	0	-	27	(注)

(注) 自己株式の増加0千株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2018年6月22日 定時株主総会	普通株式	380	30.00	2018年3月31日	2018年6月25日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年6月21日 定時株主総会	普通株式	380	利益剰余金	30.00	2019年3月31日	2019年6月24日

当連結会計年度(自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位:千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度 末株式数	摘要
発行済株式					
普通株式	12,701	-	-	12,701	
自己株式					
普通株式	27	0	-	28	(注)

(注) 自己株式の増加0千株は、単元未満株式の買取りによる増加であります。

2 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2019年6月21日 定時株主総会	普通株式	380	30.00	2019年3月31日	2019年6月24日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2020年6月26日 定時株主総会	普通株式	380	利益剰余金	30.00	2020年3月31日	2020年6月29日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
現金預け金勘定	38,708百万円	49,809百万円
定期預け金	4百万円	4百万円
当座預け金	16百万円	15百万円
普通預け金	1,606百万円	1,470百万円
現金及び現金同等物	37,079百万円	48,318百万円

(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引

(借手側)

該当ありません。

(貸手側)

(1) リース投資資産の内訳

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
リース料債権部分	2,364	2,396
見積残存価額部分	83	108
受取利息相当額	192	206
リース投資資産	2,255	2,298

(2) リース債権及びリース投資資産に係るリース料債権部分の金額の連結決算日後の回収予定額

	前連結会計年度 (2019年3月31日)		当連結会計年度 (2020年3月31日)	
	リース債権 (百万円)	リース投資資産 (百万円)	リース債権 (百万円)	リース投資資産 (百万円)
1年以内	-	709	-	727
1年超2年以内	-	585	-	617
2年超3年以内	-	470	-	481
3年超4年以内	-	333	-	329
4年超5年以内	-	173	-	155
5年超	-	91	-	84

2 オペレーティング・リース取引

(貸手側)

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
1年内	15	17
1年超	5	1
合計	20	18

3 転リース取引

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
リース投資資産	866	731
リース債務	866	731

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、預金業務、貸出業務及び有価証券運用を中心とした銀行業を中心にクレジットカード事業、リース事業及び信用保証事業等の金融サービスに係る事業を行っております。

これらの事業を行うため、市場の状況や長短のバランスを調整して、預金等による資金調達、及び貸出等の与信業務、有価証券投資等による資産運用を行っております。このように、主として金利変動を伴う金融資産及び金融負債を有しているため、金利変動による不利な影響が生じないように、当行では、資産及び負債の総合的管理(ALM)を行っております。

また、当行では、為替リスクを回避するため為替予約取引を利用しております。これは、すべてリスクヘッジを目的としたデリバティブ取引であり、投機目的での積極的利用は行っておりません。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産は、主として国内の取引先及び個人に対する貸出金であり、顧客の契約不履行によってもたらされる信用リスクに晒されております。連結決算日現在における貸出金は、主として国内の中小企業取引先及び個人に対するものであり、国内を巡る経済環境等の状況の変化により、契約条件に従った債務履行がなされない可能性があります。また、有価証券は、主に株式、債券、投資信託であり、満期保有目的、及びその他保有目的(純投資目的、政策投資目的)で保有しております。これらは、それぞれ発行体の信用リスク及び金利の変動リスク、市場価格の変動リスクに晒されております。

金融負債は、普通預金及び固定金利による定期預金を中心とする預金調達であり、資金調達に係る流動性リスクに晒されております。資産・負債には、金利の長短ミスマッチがあり、金利リスクに晒されております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスクの管理

当行グループは、当行の信用リスクに関する管理諸規程及び融資・管理業務に関する諸規程に従い、貸出金について、個別案件ごとの与信審査、与信限度額、信用情報管理、内部格付、保証や担保の設定、問題債権への対応など信用管理に関する体制を整備し運営しております。これらの与信管理は、各営業店のほか審査部により行われ、また、定期的に経営陣による常務会や取締役会を開催し、審議・報告を行っております。有価証券の発行体の信用リスク及びデリバティブ取引のカウンターパーティーリスクに関しては、証券国際部において、信用情報や時価の把握を定期的に行うことで管理しております。

市場リスクの管理

() 金利リスクの管理

当行グループは、ALMによって金利の変動リスクを管理しております。ALM及びリスク管理に関する諸規程等において、リスク管理方法や手続等を明記しており、これら諸規程に基づき、リスク管理委員会及び取締役会において、リスク等の状況の把握・確認、今後の対応等の協議を行っております。

() 為替リスクの管理

外国為替取引には、顧客による外貨預金の預入・払出や外貨両替取引、貿易・貿易外取引等があります。証券国際部では、こうした取引に対し銀行間市場において反対取引を行うことにより、外貨建の金融資産と金融負債のバランスを管理し、為替リスクを回避しております。

() 価格変動リスクの管理

有価証券の保有については、常務会で毎月に有価証券投資に係る基本方針を決定し、投資運用規程に従いリスク管理を行っております。証券国際部は、基本方針に基づき有価証券の売買を行うほか、継続的なモニタリングを通じて価格変動リスクの軽減を図っております。これらの情報は、リスク管理委員会において定期的に報告されております。

() デリバティブ取引

デリバティブ取引に関しては、取引の権限、取引の手続等リスク管理上の規程を制定し、取引の実行及び管理は証券国際部が行っており、毎月月末時点における想定元本、信用リスク、為替リスク等の状況をリスク管理委員会に報告しております。

() 市場リスクに係る定量的情報

当行において、市場リスクの影響を受ける主たる金融商品は、「預け金」、「有価証券」、「貸出金」、「預金」、「借入金」であります。当行では、これら金融資産及び金融負債について、バリュウ・アット・リスク (VaR) を用いて市場リスク量を把握しており、VaRの算定にあたっては、分散共分散法 (保有期間120日、信頼区間99%) を採用しております。

2019年3月31日 (前期の連結決算日) 現在で当行の市場リスク量 (損失額の推計値) は、全体で6,582百万円であります。

2020年3月31日 (当期の連結決算日) 現在で当行の市場リスク量 (損失額の推計値) は、全体で7,033百万円であります。

ただし、VaRは過去の相場変動をベースに統計的に算出した一定の発生確率での市場リスク量を計測しており、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下におけるリスクは捕捉できない場合があります。

資金調達に係る流動性リスクの管理

当行は、ALMを通して、適時に資金管理を行うほか、市場環境を考慮した長短の調達バランスの調整などによって、流動性リスクを管理しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません。また、外国為替、借入金、支払承諾及び支払承諾見返については、連結貸借対照表計上額の重要性が乏しいことから記載を省略しております。

前連結会計年度 (2019年3月31日)

(単位: 百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	38,708	38,708	-
(2) 有価証券			
満期保有目的の債券	1,000	1,005	5
その他有価証券	202,484	202,484	-
(3) 貸出金	529,979		
貸倒引当金 (* 1)	2,165		
	527,814	534,281	6,467
資産計	770,006	776,479	6,472
(1) 預金	678,653	678,672	18
(2) 譲渡性預金	61,530	61,530	-
負債計	740,184	740,202	18
デリバティブ取引 (* 2)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	5	5	-
ヘッジ会計が適用されているもの	-	-	-
デリバティブ取引計	5	5	-

(* 1) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(* 2) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しております。

当連結会計年度（2020年3月31日）

（単位：百万円）

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 現金預け金	49,809	49,809	-
(2) 有価証券			
その他有価証券	186,039	186,039	-
(3) 貸出金	538,006		
貸倒引当金（*1）	2,342		
	535,664	540,321	4,657
資産計	771,512	776,169	4,657
(1) 預金	681,221	681,233	11
(2) 譲渡性預金	61,833	61,833	-
負債計	743,055	743,067	11
デリバティブ取引（*2）			
ヘッジ会計が適用されていないもの	(59)	(59)	-
ヘッジ会計が適用されているもの	-	-	-
デリバティブ取引計	(59)	(59)	-

（*1）貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

（*2）デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、（ ）で表示しております。

（注1）金融商品の時価の算定方法

資 産

(1) 現金預け金

満期のない預け金については、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。満期のある預け金については、元利金の将来キャッシュ・フローに預け先の信用リスク要因を反映させ、リスクフリーレートで割り引いて時価を算定しております。なお、残存期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(2) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は日本証券業協会が公表する価格等によっております。投資信託は公表されている基準価格によっております。

自行保証付私募債は、元利金の将来キャッシュ・フローに信用リスクを反映させ、リスクフリーレートで割り引いて時価を算定しております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については「（有価証券関係）」に記載してあります。

(3) 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、元利金の将来キャッシュ・フローに信用リスク等に基づくリスク要因を反映させて、リスクフリーレートで割り引いて時価を算定しております。なお、残存期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。仕組貸出金については、割引現在価値やオプション価格モデル等により時価を算定しております。

また、破綻先及び実質破綻先に対する債権については、直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を貸倒引当金として計上しております。また、破綻懸念先に対する債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を貸倒引当金として計上しております。よって、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、時価は連結決算日における連結貸借対照表上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

負債

(1) 預金、及び(2) 譲渡性預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額（帳簿価額）を時価とみなしております。また、定期預金及び譲渡性預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、残存期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引は、通貨関連取引であり、割引現在価値等により算定した価額によっております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(2) その他有価証券」には含まれておりません。

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
非上場株式(*1)(*2)	799	874
組合出資金(*3)	42	28
合計	842	902

(*1) 非上場株式については、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから時価開示の対象とはしておりません。

(*2) 前連結会計年度において、非上場株式について1百万円の減損処理を行っております。

当連結会計年度において、非上場株式について0百万円の減損処理を行っております。

(*3) 組合出資金のうち、組合財産が非上場株式など時価を把握することが極めて困難と認められるもので構成されているものについては、時価開示の対象とはしておりません。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度(2019年3月31日)

(単位: 百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	25,595	-	-	-	-	-
有価証券(*1)						
満期保有目的の債券	1,000	-	-	-	-	-
うち国債	-	-	-	-	-	-
社債	-	-	-	-	-	-
その他の証券	1,000	-	-	-	-	-
その他有価証券のうち満期があるもの	23,310	28,877	22,648	37,098	21,997	16,793
うち国債	6,000	9,500	6,000	7,000	-	13,500
地方債	2,092	3,639	4,000	3,800	1,900	277
社債	15,218	14,738	11,872	25,300	17,000	3,015
その他の証券	-	1,000	776	998	3,097	-
貸出金(*2)	71,953	87,061	76,503	60,504	85,209	105,462
合計	121,859	115,939	99,152	97,603	107,207	122,256

(*1) 有価証券は、元本についての償還予定額を記載しており、連結貸借対照表価額とは一致いたしません。

(*2) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない110,952百万円、期間の定めのないもの32,332百万円は含めておりません。

当連結会計年度(2020年3月31日)

(単位: 百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	37,356	-	-	-	-	-
有価証券(*1)						
その他有価証券のうち満期があるもの	14,576	23,580	31,537	23,497	26,389	20,755
うち国債	4,500	7,500	8,500	2,000	-	17,700
地方債	2,036	2,918	4,200	2,700	1,000	262
社債	7,540	12,401	18,076	17,600	23,310	2,792
その他の証券	500	761	761	1,197	2,079	-
貸出金(*2)	70,623	84,167	77,123	65,024	76,570	113,343
合計	122,557	107,748	108,661	88,522	102,960	134,098

(*1) 有価証券は、元本についての償還予定額を記載しており、連結貸借対照表価額とは一致いたしません。

(*2) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない111,094百万円、期間の定めのないもの40,058百万円は含めておりません。

(注4) 預金及び譲渡性預金の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(2019年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	634,068	31,876	12,167	320	195	24
譲渡性預金	61,530	-	-	-	-	-
合計	695,598	31,876	12,167	320	195	24

(*) 要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

当連結会計年度(2020年3月31日)

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金(*)	640,956	27,894	11,885	240	222	22
譲渡性預金	61,833	-	-	-	-	-
合計	702,790	27,894	11,885	240	222	22

(*) 要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(有価証券関係)

- 1 連結貸借対照表の「有価証券」勘定以外で表示されているものはありません。
- 2 「子会社株式及び関連会社株式」については、財務諸表における注記事項として記載しております。

1 満期保有目的の債券

前連結会計年度(2019年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照表 計上額を超えるもの	国債	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	1,000	1,005	5
	小計	1,000	1,005	5
時価が連結貸借対照表 計上額を超えないもの	国債	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	小計	-	-	-
合計		1,000	1,005	5

当連結会計年度(2020年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照表 計上額を超えるもの	国債	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	小計	-	-	-
時価が連結貸借対照表 計上額を超えないもの	国債	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	小計	-	-	-
合計		-	-	-

2 その他有価証券
前連結会計年度（2019年3月31日）

	種類	連結貸借対照表 計上額（百万円）	取得原価 （百万円）	差額 （百万円）
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	2,280	1,027	1,253
	債券	143,313	140,830	2,482
	国債	42,137	41,013	1,124
	地方債	15,535	15,266	268
	社債	85,640	84,550	1,089
	その他	23,641	22,405	1,235
	小計	169,235	164,264	4,971
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	1,670	2,211	541
	債券	5,652	5,681	29
	国債	1,490	1,510	20
	地方債	469	469	0
	社債	3,692	3,700	8
	その他	25,926	26,900	973
	小計	33,249	34,793	1,544
合計		202,484	199,057	3,426

当連結会計年度（2020年3月31日）

	種類	連結貸借対照表 計上額（百万円）	取得原価 （百万円）	差額 （百万円）
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	1,069	609	459
	債券	101,505	99,962	1,542
	国債	33,432	32,730	701
	地方債	12,272	12,087	184
	社債	55,800	55,144	655
	その他	22,286	20,729	1,556
	小計	124,860	121,301	3,558
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	1,771	2,342	570
	債券	36,190	36,508	318
	国債	7,764	7,854	90
	地方債	1,042	1,044	2
	社債	27,383	27,608	225
	その他	23,216	25,790	2,573
	小計	61,178	64,641	3,462
合計		186,039	185,942	96

3 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	1,294	71	87
債券	6,124	94	-
国債	1,345	28	-
地方債	616	15	-
社債	4,162	50	-
その他	12,310	54	645
合計	19,729	219	733

当連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	704	213	2
債券	14,264	189	-
国債	8,007	155	-
地方債	1,001	1	-
社債	5,254	32	-
その他	7,074	84	34
合計	22,042	486	36

4 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券（時価を把握することが極めて困難なものを除く。）のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該連結会計年度の損失として処理（以下「減損処理」という。）することとしております。

前連結会計年度における減損処理額は、117百万円（株式117百万円）であります。

当連結会計年度における減損処理額は、231百万円（株式231百万円）であります。

なお、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、個々の銘柄の有価証券について連結会計年度末日における時価が取得原価に比べて50%以上下落した場合、また、下落率が30%以上50%未満の銘柄については、発行会社の業績の推移などを考慮の上、時価の回復可能性がないと判断された場合であります。

(金銭の信託関係)

該当事項はありません。

(その他有価証券評価差額金)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

前連結会計年度 (2019年 3月31日)

	金額 (百万円)
評価差額	3,426
その他有価証券	3,426
() 繰延税金負債	1,431
その他有価証券評価差額金 (持分相当額調整前)	1,995
() 非支配株主持分相当額	65
その他有価証券評価差額金	1,929

当連結会計年度 (2020年 3月31日)

	金額 (百万円)
評価差額	96
その他有価証券	96
() 繰延税金負債	1,055
その他有価証券評価差額金 (持分相当額調整前)	959
() 非支配株主持分相当額	29
その他有価証券評価差額金	988

(デリバティブ取引関係)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

該当ありません。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(2019年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-
	通貨オプション				
	売建	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-
店頭	通貨スワップ				
	為替予約				
	売建	3,283	-	4	4
	買建	45	-	0	0
	通貨オプション				
	売建	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-
	その他				
売建	-	-	-	-	
	買建	-	-	-	-
合計		-	-	5	5

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定
割引現在価値等により算定しております。

当連結会計年度(2020年3月31日)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-
	通貨オプション				
	売建	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-
店頭	通貨スワップ				
	為替予約				
	売建	3,149	-	59	59
	買建	42	-	0	0
	通貨オプション				
	売建	-	-	-	-
	買建	-	-	-	-
	その他				
売建	-	-	-	-	
	買建	-	-	-	-
合計		-	-	59	59

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定
割引現在価値等により算定しております。

- (3) 株式関連取引
該当ありません。
 - (4) 債券関連取引
該当ありません。
 - (5) 商品関連取引
該当ありません。
 - (6) クレジット・デリバティブ取引
該当ありません。
- 2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引
該当事項はありません。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当行及び連結子会社は、確定給付型の制度として、厚生年金基金制度及び退職一時金制度を設けておりましたが、厚生年金基金制度は2005年4月1日付で確定給付型の企業年金基金制度へ移行しました。

また、当行は厚生年金基金の代行部分について、2003年3月1日に厚生労働大臣から将来分支給義務免除の認可を受け、同様に2005年4月1日に厚生労働大臣から過去分支給義務免除の認可を受けました。

当行は2015年4月1日に退職給付企業年金制度の一部について、確定拠出年金制度へ移行しました。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
退職給付債務の期首残高	1,907	1,803
勤務費用	83	80
利息費用	12	11
数理計算上の差異の発生額	4	28
退職給付の支払額	194	158
過去勤務費用の発生額	-	-
その他	-	-
退職給付債務の期末残高	1,803	1,764

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
年金資産の期首残高	999	957
期待運用収益	19	19
数理計算上の差異の発生額	7	41
事業主からの拠出額	-	-
退職給付の支払額	54	50
その他	-	-
年金資産の期末残高	957	884

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	511	486
年金資産	957	884
非積立型制度の退職給付債務	445	397
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	1,291	1,278
退職給付に係る負債	845	880
退職給付に係る資産	445	397
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	845	880

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額 (百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
勤務費用	83	80
利息費用	12	11
期待運用収益	19	19
数理計算上の差異の費用処理額	5	2
過去勤務費用の費用処理額	21	21
その他	-	-
確定給付制度に係る退職給付費用	59	54

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
過去勤務費用	21	21
数理計算上の差異	2	66
その他	-	-
合計	19	88

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
未認識過去勤務費用	129	107
未認識数理計算上の差異	25	41
その他	-	-
合計	154	66

(7) 年金資産に関する事項

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

区分	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
債券	72%	72%
株式	24%	20%
現金及び預金	4%	8%
その他	-	-
合計	100%	100%

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎(加重平均で表しております。)

区分	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
割引率	0.64%	0.64%
長期期待運用収益率	2.00%	2.00%
予想昇給率	4.00%	4.00%

3 確定拠出制度

当行の確定拠出制度への要拠出額は前連結会計年度117百万円、当連結会計年度113百万円であります。

(ストック・オプション等関係)
該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	958百万円	1,045百万円
退職給付に係る負債	386	382
減価償却費	94	88
有価証券償却	177	137
その他	1,115	1,611
繰延税金資産小計	2,732	3,264
評価性引当額	1,503	1,990
繰延税金資産合計	1,228	1,274
繰延税金負債		
退職給付に係る資産	133	118
その他有価証券評価差額金	1,431	1,055
繰延税金負債合計	1,564	1,174
繰延税金資産(は負債)の純額	336百万円	99百万円

2 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
法定実効税率	29.9%	29.9%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3	0.3
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.3	0.5
住民税均等割等	1.1	1.5
評価性引当額の増減	3.9	5.9
その他	0.5	0.7
税効果会計適用後の法人税等の負担率	35.4%	26.0%

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当行グループの報告セグメントは、当行グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当行グループは、当行及び連結子会社2社で構成され、銀行業を中心に、リース事業、クレジットカード事業及び信用保証事業といった金融サービスに係る事業を行っており、「銀行業務」、「リース業務」を報告セグメントとしております。

「銀行業務」は、預金、貸出、有価証券投資、内国為替、外国為替、証券投資信託及び保険商品等の窓口販売業務等を行っております。「リース業務」は、ファイナンス・リース等の業務を行っております。

2 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。報告セグメントの利益は、経常利益ベースの数値であります。

なお、セグメント間の内部経常収益は、第三者間取引価格に基づいております。

3 報告セグメントごとの経常収益、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度(自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業務	リース業務	計				
経常収益							
(1) 外部顧客に対する経常収益	11,351	877	12,229	343	12,572	7	12,564
(2) セグメント間の内部経常収益	23	2	25	42	68	68	-
計	11,375	879	12,254	386	12,641	76	12,564
セグメント利益	759	40	799	70	869	1	867
セグメント資産	785,972	3,227	789,199	7,747	796,947	7,173	789,773
セグメント負債	746,670	2,375	749,045	6,002	755,048	6,690	748,358
その他の項目							
減価償却費	1,022	8	1,031	5	1,036	-	1,036
資金運用収益	8,089	0	8,089	32	8,121	7	8,114
資金調達費用	158	9	168	0	168	5	162
特別利益	1,176	-	1,176	-	1,176	-	1,176
(固定資産処分益)	1,176	-	1,176	-	1,176	-	1,176
特別損失	76	4	80	0	81	-	81
(固定資産処分損)	76	4	80	0	81	-	81
税金費用	669	16	685	10	695	0	695
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	408	-	408	3	411	-	411

(注) 1 一般企業の売上高に代えて、それぞれ経常収益を記載しております。

2 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、クレジットカード事業、信用保証業であります。

3 外部顧客に対する経常収益の調整額 7百万円は、貸倒引当金戻入益の調整であります。

4 セグメント利益の調整額 1百万円、セグメント資産の調整額 7,173百万円、セグメント負債の調整額 6,690百万円、資金運用収益の調整額 7百万円、資金調達費用の調整額 5百万円及び税金費用の調整額 0百万円は、いずれもセグメント間取引消去であります。

5 セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

当連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他	合計	調整額	連結財務諸表計上額
	銀行業務	リース業務	計				
経常収益							
（1）外部顧客に対する経常収益	11,266	865	12,132	340	12,473	20	12,452
（2）セグメント間の内部経常収益	20	2	23	39	62	62	-
計	11,287	868	12,155	379	12,535	83	12,452
セグメント利益	1,397	36	1,434	33	1,467	1	1,466
セグメント資産	787,257	3,255	790,513	6,997	797,510	6,855	790,655
セグメント負債	750,205	2,467	752,672	5,264	757,936	6,372	751,564
その他の項目							
減価償却費	969	4	973	6	979	-	979
資金運用収益	7,934	2	7,936	30	7,966	8	7,958
資金調達費用	144	10	154	0	155	6	148
特別利益	14	-	14	-	14	-	14
（固定資産処分益）	14	-	14	-	14	-	14
特別損失	27	0	27	-	27	-	27
（固定資産処分損）	27	0	27	-	27	-	27
税金費用	368	8	376	1	378	0	378
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	220	5	225	8	234	-	234

（注）1 一般企業の売上高に代えて、それぞれ経常収益を記載しております。

2 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、クレジットカード事業、信用保証業であります。

3 外部顧客に対する経常収益の調整額 20百万円は、貸倒引当金繰入額の調整であります。

4 セグメント利益の調整額 1百万円、セグメント資産の調整額 6,855百万円、セグメント負債の調整額 6,372百万円、資金運用収益の調整額 8百万円、資金調達費用の調整額 6百万円及び税金費用の調整額 0百万円は、いずれもセグメント間取引消去であります。

5 セグメント利益は、連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

1 サービスごとの情報

（単位：百万円）

	貸出業務	有価証券投資業務	役務取引業務	その他	合計
外部顧客に対する経常収益	6,368	2,144	2,861	1,189	12,564

（注）一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 地域ごとの情報

（1）経常収益

本邦以外の外部顧客に対する経常収益がないため、該当事項はありません。

（2）有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

1 サービスごとの情報

（単位：百万円）

	貸出業務	有価証券 投資業務	役務取引業務	その他	合計
外部顧客に対する 経常収益	6,068	2,417	2,913	1,052	12,452

（注） 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 地域ごとの情報

(1) 経常収益

本邦以外の外部顧客に対する経常収益がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

前連結会計年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る）等

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員及びその近親者	笠間 善裕			当行取締役	被所有直接 0.00%	資金貸借	資金の貸出 利息の受取	3 1	貸出金 (注2)	69

取引条件及び取引条件の決定方針等

(注) 1 取引条件については、一般の取引と同様に決定しております。

2 当行取締役笠間善裕の近親者である笠間京子の逝去に伴い、相続により同氏の債務引受を行ったものであります。

当連結会計年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主（個人の場合に限る）等

種類	会社等の名称又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等の所有 (被所有) 割合	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員及びその近親者	笠間 善裕			当行取締役	被所有直接 0.00%	資金貸借	資金の貸出 利息の受取	2 0	貸出金	66

取引条件及び取引条件の決定方針等

(注) 取引条件については、一般の取引と同様に決定しております。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
1株当たり純資産額	3,200円92銭	3,019円78銭
1株当たり当期純利益	98円35銭	83円86銭

(注) 1 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当連結会計年度 (2020年3月31日)
純資産の部の合計額(百万円)	41,415	39,090
純資産の部の合計額から控除する金額(百万円)	848	821
(うち非支配株主持分)	848	821
普通株式に係る期末の純資産額(百万円)	40,567	38,268
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数(千株)	12,673	12,672

2 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当連結会計年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
1株当たり当期純利益			
親会社株主に帰属する当期純利益	百万円	1,246	1,062
普通株主に帰属しない金額	百万円	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する当 期純利益	百万円	1,246	1,062
普通株式の期中平均株式数	千株	12,673	12,673

(注) 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないので記載しておりません。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当ありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
借入金	400	470	0.97	-
借入金	400	470	0.97	2020年9月～ 2024年12月
1年以内に返済予定のリース債務	236	220	-	-
リース債務 (1年以内に返済予定のものを除く。)	629	510	-	2021年6月～ 2027年1月

(注) 1 「平均利率」は、期末日現在の「利率」及び「当期末残高」により算出(加重平均)しております。

2 リース債務については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額で連結貸借対照表に計上しているため、平均利率は記載しておりません。

3 借入金及びリース債務の連結決算日後5年以内における返済額は次のとおりであります。

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
借入金(百万円)	325	55	40	35	15
リース債務(百万円)	220	194	150	97	44

銀行業は、預金の受入れ、コール・手形市場からの資金の調達・運用等を営業活動として行っているため、借入金等明細表については連結貸借対照表中「負債の部」の「借入金」及び「その他負債」中のリース債務の内訳を記載しております。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
経常収益(百万円)	3,070	6,117	9,233	12,452
税金等調整前四半期(当期) 純利益(百万円)	433	635	1,055	1,452
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益 (百万円)	324	477	693	1,062
1株当たり四半期(当期) 純利益(円)	25.60	37.65	54.72	83.86

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益 (円)	25.60	12.05	17.07	29.14

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
資産の部		
現金預け金	7 38,706	7 49,808
現金	13,112	12,452
預け金	25,593	37,356
有価証券	1, 7, 10 204,427	1, 7, 10 187,232
国債	43,628	41,196
地方債	16,005	13,315
社債	89,332	83,183
株式	4,851	4,006
その他の証券	50,610	45,530
貸出金	2, 3, 4, 5, 8 530,084	2, 3, 4, 5, 8 538,354
割引手形	6 1,359	6 986
手形貸付	17,550	16,216
証書貸付	478,553	480,611
当座貸越	32,620	40,540
外国為替	440	450
外国他店預け	440	450
その他資産	7 1,140	7 1,108
前払費用	5	2
未収収益	652	636
金融派生商品	9	0
その他の資産	7 472	7 468
有形固定資産	9 10,328	9 10,054
建物	1,891	1,838
土地	7,792	7,792
建設仮勘定	0	-
その他の有形固定資産	644	424
無形固定資産	1,494	955
ソフトウェア	1,373	835
その他の無形固定資産	121	120
前払年金費用	362	391
繰延税金資産	-	109
支払承諾見返	983	1,079
貸倒引当金	2,080	2,274
資産の部合計	785,888	787,270

(単位：百万円)

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
負債の部		
預金	7 679,056	7 681,903
当座預金	10,479	9,422
普通預金	397,950	413,611
貯蓄預金	6,731	6,598
通知預金	1,218	3,123
定期預金	260,521	246,439
定期積金	428	215
その他の預金	1,728	2,491
譲渡性預金	61,680	61,833
外国為替	-	0
未払外国為替	-	0
その他負債	1,748	2,539
未払法人税等	346	105
未払費用	366	322
前受収益	157	172
給付補填備金	0	0
金融派生商品	4	59
資産除去債務	35	35
その他の負債	836	1,843
賞与引当金	117	122
退職給付引当金	1,350	1,329
睡眠預金払戻損失引当金	328	275
偶発損失引当金	139	115
繰延税金負債	225	-
再評価に係る繰延税金負債	1,065	1,065
支払承諾	983	1,079
負債の部合計	746,695	750,264
純資産の部		
資本金	14,743	14,743
資本剰余金	1,294	1,294
資本準備金	1,294	1,294
利益剰余金	19,594	20,229
利益準備金	641	717
その他利益剰余金	18,953	19,512
別途積立金	14,100	14,900
繰越利益剰余金	4,853	4,612
自己株式	48	48
株主資本合計	35,584	36,219
その他有価証券評価差額金	1,746	1,075
土地再評価差額金	1,862	1,862
評価・換算差額等合計	3,609	786
純資産の部合計	39,193	37,005
負債及び純資産の部合計	785,888	787,270

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2018年4月1日 至 2019年3月31日)	当事業年度 (自 2019年4月1日 至 2020年3月31日)
経常収益	11,375	11,287
資金運用収益	8,089	7,934
貸出金利息	6,131	5,964
有価証券利息配当金	1,926	1,929
コールローン利息	1	-
預け金利息	27	40
その他の受入利息	1	0
役務取引等収益	2,601	2,642
受入為替手数料	709	695
その他の役務収益	1,891	1,946
その他業務収益	141	264
商品有価証券売買益	0	0
国債等債券売却益	141	264
その他経常収益	542	446
貸倒引当金戻入益	108	-
償却債権取立益	79	81
株式等売却益	77	222
その他の経常収益	277	142
経常費用	10,616	9,890
資金調達費用	158	144
預金利息	149	134
譲渡性預金利息	9	10
役務取引等費用	948	1,059
支払為替手数料	99	97
その他の役務費用	849	961
その他業務費用	686	77
外国為替売買損	36	37
国債等債券売却損	645	34
その他の業務費用	4	5
営業経費	8,254	7,708
その他経常費用	567	901
貸倒引当金繰入額	-	361
貸出金償却	228	211
株式等売却損	87	2
株式等償却	118	231
その他の経常費用	132	94
経常利益	759	1,397
特別利益	1,176	14
固定資産処分益	1,176	14
特別損失	76	27
固定資産処分損	76	27
税引前当期純利益	1,858	1,384
法人税、住民税及び事業税	504	385
法人税等調整額	164	17
法人税等合計	669	368
当期純利益	1,189	1,015

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 2018年4月1日 至 2019年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本								自己株式	株主資本 合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			利益剰余金 合計			
		資本準備金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益剰余金					
					別途積立金	繰越利益 剰余金				
当期首残高	14,743	1,294	1,294	565	13,300	4,328	18,193	47	34,184	
当期変動額										
利益準備金の積立				76		76	-			
別途積立金の積立					800	800	-			
剰余金の配当						380	380		380	
当期純利益						1,189	1,189		1,189	
自己株式の取得								0	0	
土地再評価差額金 の取崩						591	591		591	
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)										
当期変動額合計	-	-	-	76	800	524	1,400	0	1,400	
当期末残高	14,743	1,294	1,294	641	14,100	4,853	19,594	48	35,584	

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有 価証券評 価差額金	土地再評 価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	821	2,453	3,275	37,459
当期変動額				
利益準備金の積立				
別途積立金の積立				
剰余金の配当				380
当期純利益				1,189
自己株式の取得				0
土地再評価差額金 の取崩				591
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)	925	591	333	333
当期変動額合計	925	591	333	1,734
当期末残高	1,746	1,862	3,609	39,193

当事業年度（自 2019年4月1日 至 2020年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本								自己株式	株主資本 合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			利益剰余金 合計			
		資本準備金	資本剰余金 合計	利益準備金	その他利益剰余金					
					別途積立金	繰越利益 剰余金				
当期首残高	14,743	1,294	1,294	641	14,100	4,853	19,594	48	35,584	
当期変動額										
利益準備金の積立				76		76	-			
別途積立金の積立					800	800	-			
剰余金の配当						380	380		380	
当期純利益						1,015	1,015		1,015	
自己株式の取得								0	0	
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)										
当期変動額合計	-	-	-	76	800	240	635	0	635	
当期末残高	14,743	1,294	1,294	717	14,900	4,612	20,229	48	36,219	

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有 価証券評 価差額金	土地再評 価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	1,746	1,862	3,609	39,193
当期変動額				
利益準備金の積立				
別途積立金の積立				
剰余金の配当				380
当期純利益				1,015
自己株式の取得				0
株主資本以外の項目の 当期変動額 (純額)	2,822		2,822	2,822
当期変動額合計	2,822	-	2,822	2,187
当期末残高	1,075	1,862	786	37,005

【注記事項】

(重要な会計方針)

1 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法（売却原価は移動平均法により算定）により行っております。

2 有価証券の評価基準及び評価方法

有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、子会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については原則として決算日の市場価格等に基づく時価法（売却原価は移動平均法により算定）、ただし、時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

3 デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

4 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

有形固定資産は、定率法（ただし、1998年4月1日以後に取得した建物（建物附属設備を除く。）並びに2016年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法）を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物：8年～50年

その他：3年～20年

(2) 無形固定資産

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間（5年）に基づいて償却しております。

5 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建資産・負債は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。

6 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という。）に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者（以下「実質破綻先」という。）に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に係る債権については、債権額から担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。上記以外の債権については、主として今後1年間の予想損失額又は今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間又は3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正を加えて算定しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は6,870百万円（前事業年度末は7,368百万円）であります。

(2) 賞与引当金

賞与引当金は、従業員への賞与の支払いに備えるため、従業員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。

(3) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、過去勤務費用及び数理計算上の差異の費用処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用 : その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理

数理計算上の差異 : 各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から費用処理

(4) 睡眠預金払戻損失引当金

睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの将来の払戻請求に備えるため、過去の払戻実績に基づく将来の払戻損失見込額を計上しております。

(5) 偶発損失引当金

偶発損失引当金は、信用保証協会に対する責任共有制度負担金の支払いに備えるため、過去の実績に基づき、将来の支払見込額を計上しております。

7 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

消費税及び地方消費税(以下、消費税等という。)の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。

(追加情報)

新型コロナウイルスの感染拡大は、主に貸出金等の信用リスクに影響を及ぼす可能性があります。当該感染拡大は、半年程度で収束し、その後は緩やかな回復に向かうものと想定しております。また、当行の主たる営業基盤である福島県における感染状況や事業性貸出先への訪問等による影響調査の実施状況、さらには、政府、自治体、金融機関が一体となった資金繰り支援等により、貸出金にかかる信用リスクへの影響は限定的であるとの仮定に基づき、当事業年度の貸倒引当金を計上しております。

なお、当該仮定には不確実性を有しており、新型コロナウイルス感染症の感染拡大や経済への影響の変化等により、翌年度以降の業績に影響を及ぼす可能性があります。

(貸借対照表関係)

1 関係会社の株式総額

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
株式	496百万円	496百万円

2 貸出金のうち破綻先債権額及び延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
破綻先債権額	374百万円	311百万円
延滞債権額	10,406百万円	10,758百万円

なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(1965年政令第97号)第96条第1項第3号イからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。

また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。

3 貸出金のうち3カ月以上延滞債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
3カ月以上延滞債権額	18百万円	13百万円

なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。

4 貸出金のうち貸出条件緩和債権額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
貸出条件緩和債権額	2,072百万円	2,093百万円

なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。

5 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
合計額	12,872百万円	13,177百万円

なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

6 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号 2002年2月13日)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
	1,359百万円	986百万円

7 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	31,282百万円	30,969百万円
その他資産	5百万円	5百万円
現金預け金	4百万円	4百万円
計	31,293百万円	30,980百万円
担保資産に対応する債務		
預金	671百万円	1,536百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保として、次のものを差し入れております。

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
有価証券	12,829百万円	9,170百万円

また、その他の資産には、敷金及び保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
敷金	116百万円	112百万円
保証金	36百万円	31百万円

8 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸し付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
融資未実行残高	54,253百万円	52,950百万円
うち原契約期間が1年以内のもの(又は 任意の時期に無条件で取消可能なもの)	43,343百万円	45,650百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

9 有形固定資産の圧縮記帳額

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
圧縮記帳額	1,222百万円	1,211百万円
(当該事業年度の圧縮記帳額)	(-)	(-)

10 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
	1,362百万円	2,165百万円

11 取締役及び監査役との間の取引による取締役及び監査役に対する金銭債権総額

前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
69百万円	66百万円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式
前事業年度(2019年3月31日)
該当ありません。

当事業年度(2020年3月31日)
該当ありません。

(注) 時価を把握することが極めて困難と認められる子会社株式の貸借対照表計上額

(単位:百万円)

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
子会社株式	496	496

市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「子会社株式及び関連会社株式」には含めておりません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	874百万円	961百万円
退職給付引当金	403	397
減価償却費	94	88
有価証券償却	177	137
その他	1,096	1,585
繰延税金資産小計	2,646	3,170
評価性引当額	1,444	1,941
繰延税金資産合計	1,202	1,228
繰延税金負債		
前払年金費用	108	116
その他有価証券評価差額金	1,319	1,002
繰延税金負債合計	1,427	1,119
繰延税金資産(は負債)の純額	225百万円	109百万円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (2019年3月31日)	当事業年度 (2020年3月31日)
法定実効税率 (調整)	29.9%	29.9%
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.3	0.3
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.3	0.5
住民税均等割等	1.1	1.5
評価性引当額の減少	4.5	5.4
その他	0.4	0.8
税効果会計適用後の法人税等の負担率	35.9%	26.6%

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却累 計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引当期末 残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	9,657	85	145	9,597	7,758	127	1,838
土地	7,792 [2,915]	- [-]	- [-]	7,792 [2,915]	-	-	7,792
建設仮勘定	0	4	5	-	-	-	-
その他の有形固定資産	3,994 [12]	42 [-]	238 [-]	3,798 [12]	3,373	209	424
有形固定資産計	21,444	132	389	21,187	11,132	336	10,054
無形固定資産							
ソフトウェア	-	-	-	3,167	2,332	632	835
その他の無形固定資産	-	-	-	144	24	0	120
無形固定資産計	-	-	-	3,312	2,356	632	955
その他	-	-	-	-	-	-	-

(注) 1 無形固定資産の金額が資産総額の100分の1以下であるため、無形固定資産の「当期首残高」「当期増加額」「当期減少額」の記載を省略しております。

2 「当期首残高」、「当期増加額」、「当期減少額」及び「当期末残高」欄の[]内は内書きで、土地の再評価に関する法律（1998年法律第34号）により行った土地の再評価実施前の帳簿価額との差額であります。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	2,080	2,274	167	1,912	2,274
一般貸倒引当金	572	696	-	572	696
個別貸倒引当金	1,507	1,577	167	1,340	1,577
うち非居住者向け債権分	-	-	-	-	-
賞与引当金	117	122	117	-	122
睡眠預金払戻損失引当金	328	-	52	-	275
偶発損失引当金	139	115	-	139	115
計	2,664	2,513	336	2,052	2,788

(注) 当期減少額(その他)欄に記載の減少額はそれぞれ次の理由によるものであります。

一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金・・・・・・洗替による取崩額

偶発損失引当金・・・・・・洗替による取崩額

未払法人税等

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
未払法人税等	346	105	346	-	105
未払法人税等	236	40	236	-	40
未払事業税	109	64	109	-	64

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・買増し	
取扱場所	(特別口座) 東京都中央区日本橋茅場町一丁目2番4号 日本証券代行株式会社
株主名簿管理人	東京都中央区八重洲一丁目2番1号 みずほ信託銀行株式会社
取次所	-
買取・買増手数料	株式の売買の委託に係る手数料相当額として別途定める金額
公告掲載方法	当行の公告掲載方法は電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告にすることができない場合は、福島市において発行する福島民報及び福島民友に掲載する。 公告掲載URL https://www.daitobank.co.jp/
株主に対する特典	株主優遇定期預金(毎年3月末時点で100株以上保有の株主本人)

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当行は、法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- | | | | | | |
|---------------------------|--|---|-------------|-------------|------------|
| (1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書 | 事業年度 | 自 | 2018年4月1日 | 2019年6月21日 | |
| | 第114期 | 至 | 2019年3月31日 | | 関東財務局長に提出。 |
| (2) 内部統制報告書 | 事業年度 | 自 | 2018年4月1日 | 2019年6月21日 | |
| | 第114期 | 至 | 2019年3月31日 | | 関東財務局長に提出。 |
| (3) 四半期報告書及び確認書 | 第115期 | 自 | 2019年4月1日 | 2019年8月9日 | |
| | 第1四半期 | 至 | 2019年6月30日 | | 関東財務局長に提出。 |
| | 第115期 | 自 | 2019年7月1日 | 2019年11月19日 | |
| | 第2四半期 | 至 | 2019年9月30日 | | 関東財務局長に提出。 |
| | 第115期 | 自 | 2019年10月1日 | 2020年2月7日 | |
| | 第3四半期 | 至 | 2019年12月31日 | | 関東財務局長に提出。 |
| (4) 臨時報告書 | 企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく臨時報告書 | | | 2019年6月27日 | 関東財務局長に提出。 |
| | 企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第4号(主要株主の異動)の規定に基づく臨時報告書 | | | 2020年6月4日 | 関東財務局長に提出。 |

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2020年6月25日

株式会社 大東銀行

取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人
東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 富樫 健一 印

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 久保 暢子 印

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社大東銀行の2019年4月1日から2020年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社大東銀行及び連結子会社の2020年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社大東銀行の2020年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、株式会社大東銀行が2020年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- () 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
- 2 XBRLデータは監査の対象には含まれておりません。

独立監査人の監査報告書

2020年6月25日

株式会社 大東銀行

取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人
東京事務所

指定有限責任社員 公認会計士 富樫 健一 印
業務執行社員

指定有限責任社員 公認会計士 久保 暢子 印
業務執行社員

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社大東銀行の2019年4月1日から2020年3月31日までの第115期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社大東銀行の2020年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業的前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。

- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

() 1 上記は監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。

2 XBRLデータは監査の対象には含まれておりません。